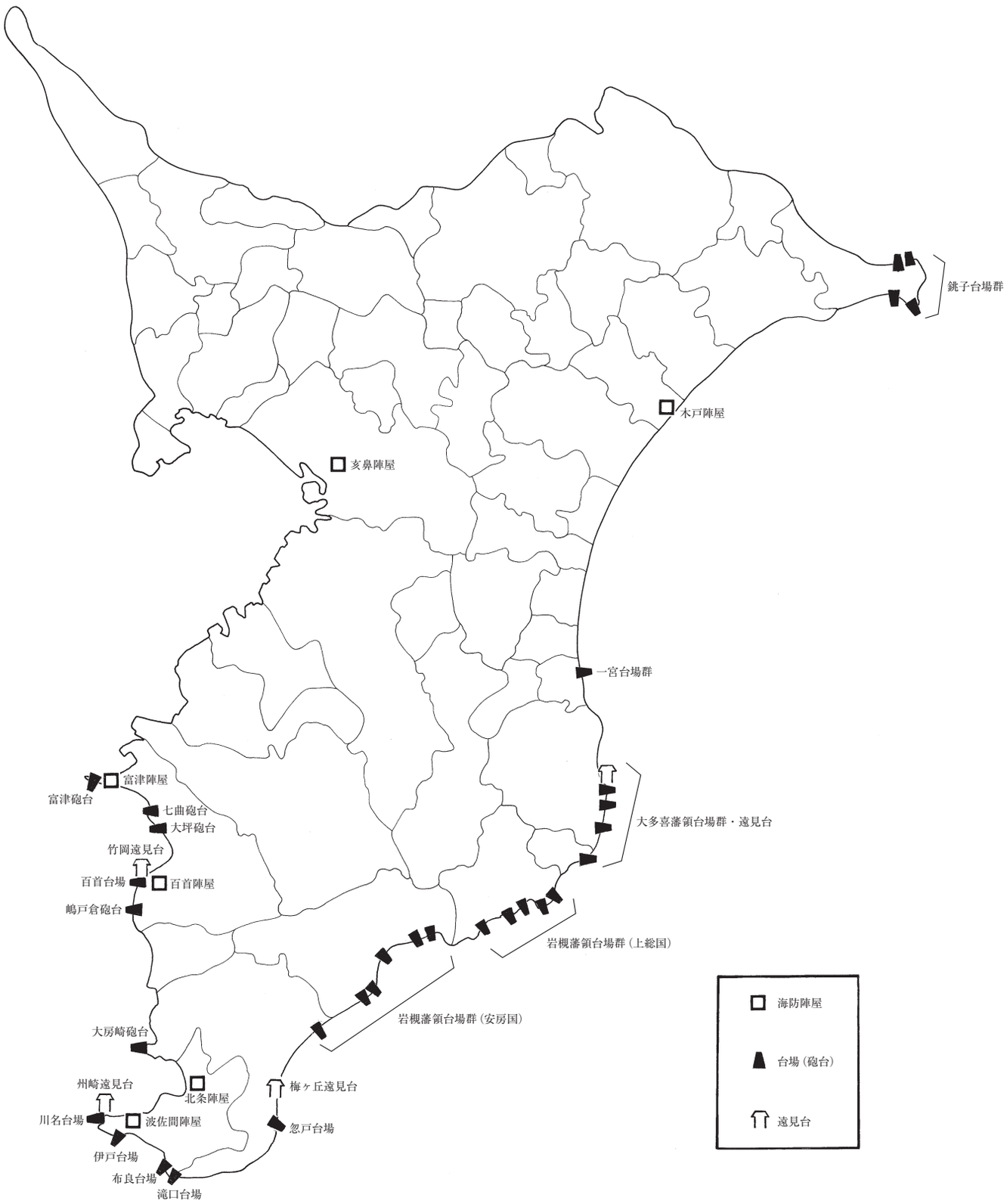
第３章　海防陣屋・台場



第105図　海防陣屋・台場の位置

第１節　海防陣屋

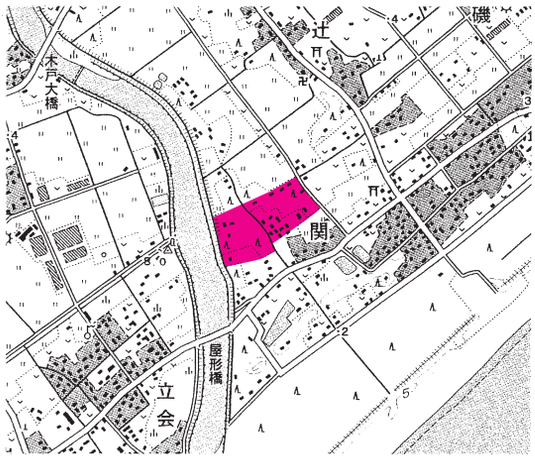
1．【木戸陣屋】山武郡横芝光町木戸字七ノ割ほか／下総国匝瑳郡木戸村

1．藩名　佐倉藩：堀田正睦―正倫

2．期間　嘉永元（1848）年～ 明治３年

3．位置　栗山川の河口から約700m程遡った左岸岸辺にあり、現在宅地・山林ほかとなっている。

4．規模　凡そ南北250m、東西400m。文献①に拠れば「其の地平坦にして周囲に土塁を廻し中央に高丘有り望遠台の址なり」とみえる。



第106図　木戸陣屋の位置

5．歴史　嘉永元年、幕府から東海岸警備を命じられた佐倉藩は新たに木戸村を替え地として与えられ、ここに陣屋（木戸村御小屋）を設けた。陣屋は栗山川に面した砂地にあり、変形六角形で、周囲を土塁で囲み、４か所の門、中央に役所と遠見台、南側角に煙硝蔵、武術・砲術所、同心長屋等があった。陣屋詰の構成は御備奉行・御先筒物頭・大目付以下30数名で、１番手～３番手に編成されており、任期は約３か月であった（文献②）。明治３年、陣屋は廃された。裏門と伝えられる長屋門が横芝光町木戸に、また門の一つとされる櫓門が同町屋形に現存する。

6．関連文献

① 匝瑳郡教育会　1921『匝瑳郡誌』

②佐倉市　1977『佐倉市史』巻二

7．関連資料

①「木戸小屋取立図」（篠丸家文書／文献②）

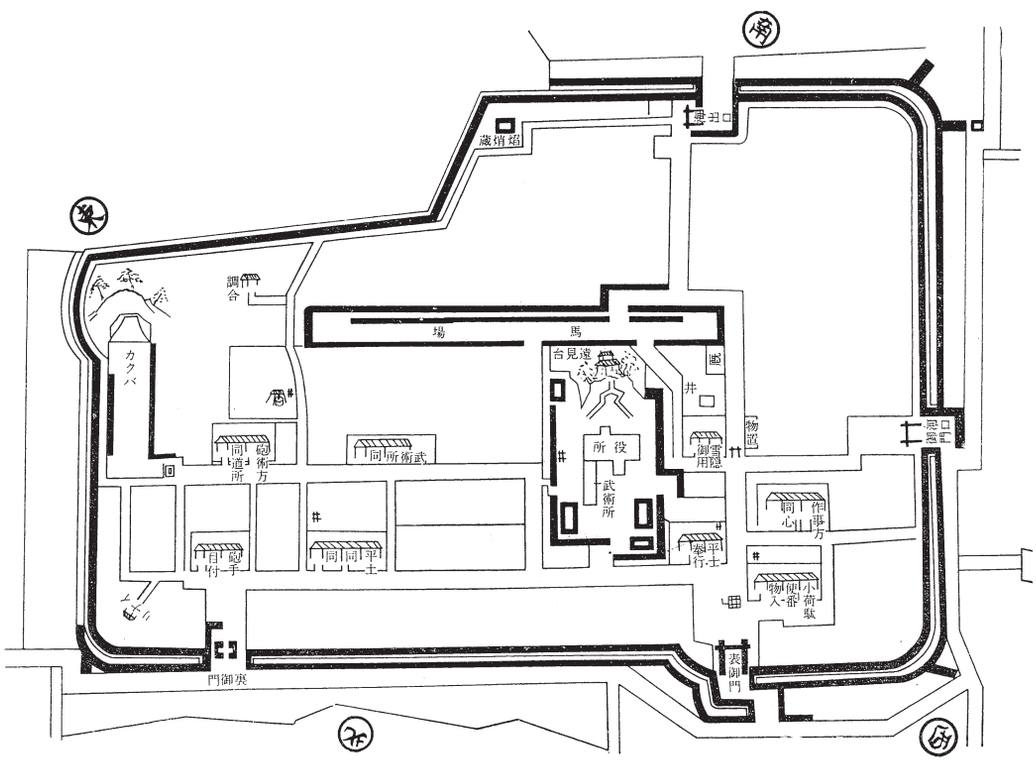
②「年寄部屋日記」（『千葉県史料』近世篇）

図版108　木戸陣屋跡遠景（栗山川対岸から）

図版109　木戸陣屋移築長屋門

図版110　木戸陣屋本陣跡近景

図版111　栗山川河口と木戸浜



第107図　木戸陣屋見取図（資料①）

2．【亥鼻陣屋（千葉御小屋）】千葉市亥鼻町１丁目／下総国千葉郡千葉町

1．藩名　佐倉藩：堀田正愛（まさちか）―正睦（まさよし）

2．期間　文政７（1824）年～弘化元（1844）年

3．位置　資料①に「千葉町に臨みたる猪の鼻山に御小屋を建築し、御門外に所々へ房総固人数小屋場と書したる傍示杭を建てたり」とあって、今の千葉市郷土博物館一帯の地と想定される。

4．規模　不明。

5．歴史　文政６（1823）年９月、幕府は佐倉藩ほか（久留里藩）に、異国船渡来の際は出陣するよう命じた。これに応じ、藩では隊の編成や武器・武具等を揃え、海路参集する都合から湊に近い丘で且つ中世城郭跡の亥鼻山に「御小屋」を設置した（文政７年９月完成）。小屋詰藩士は先手物頭・側用人・備副奉行・大目付ほか100名以上で、１番手から３番手に編成されており、子弟の教育上学問所も設けられた（亥鼻学問所―成徳南庠）。約20年後の天保15年５月、幕命（閉鎖の指示：「最早不及其儀」）により同年11月に廃止した。

6．調査　亥鼻城跡の発掘調査は公園整備等に関連して数回行われているが、1996年度の調査（文献③）は博物館の北側から東側外周が広く対象となった点で、亥鼻台地の活用を知る上で見逃せない。古代～中世に渡る遺構が密に重複し、とりわけ中世の居館らしき薬研堀の堀囲みの空間が注目（博物館の北東部に一部掛かる状態で検出）されるものの、近世の遺構は１基の土坑と溝を除いては明瞭でない。しかし、土坑や調査区内から出土した多くの陶磁器は指摘されているように、幕末期それも陣屋の存続時期とほぼ一致する。北東部で検出された無数のピット群（の一部）が長屋の地業に該当する可能性はあろう。

6．関連文献

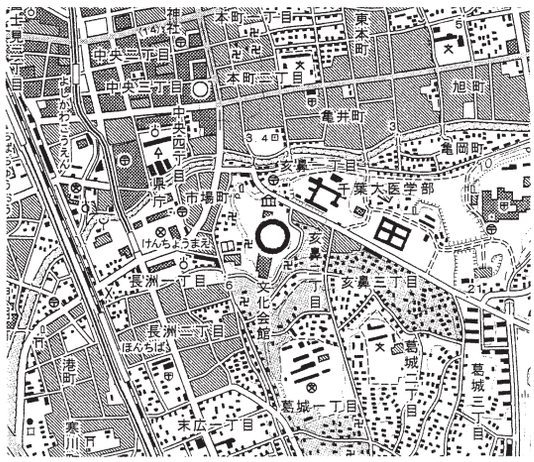
①佐倉市　1978『佐倉市史』巻二

②千葉県　1985　千葉県史料近世篇『佐倉藩紀氏雑録続集』

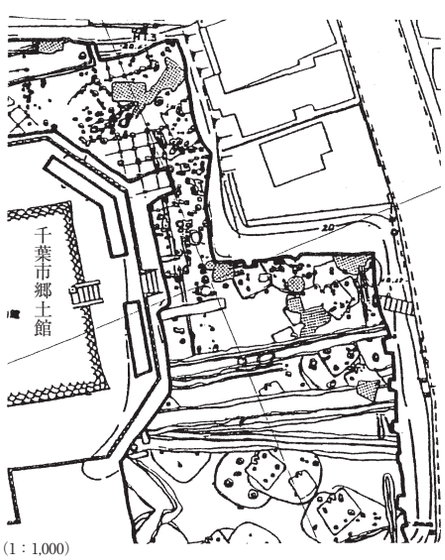
③倉田義広　1999『千葉市亥鼻城跡』千葉市教育委員会

7．関連資料

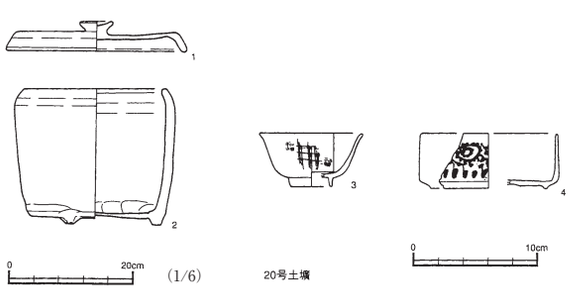
②「安房上総備場手当大略」（文献②）



第108図　亥鼻陣屋の位置

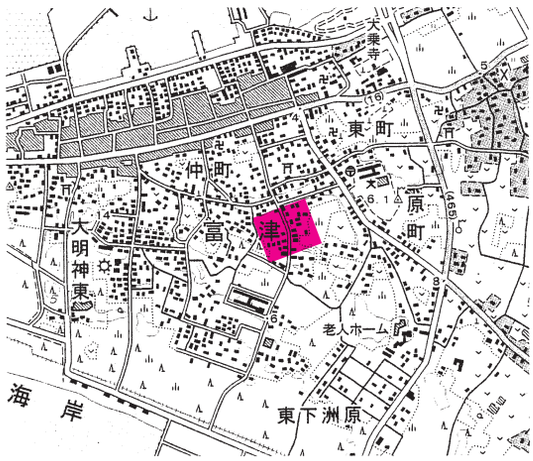


第109図　亥鼻城（陣屋）跡調査区（部分）（文献③）



第110図　亥鼻城（陣屋）跡19世紀代土坑出土遺物（文献③）

3．【富津陣屋】富津市富津字陣屋跡ほか／上総国天羽郡富津村



第111図　富津陣屋の位置

1．藩名　①白河藩：松平定信
②幕府代官：森覚蔵（―羽倉―篠田）
③忍藩：阿部忠国
④会津藩：松平容敬
⑤柳川藩：立花鑑寛
⑥二本松藩：丹羽長富
⑦前橋藩：松平直克

2．期間　①文化７（1810）年～文政６（1823）年
②文政６（1823）年～天保13（1842）年
③天保13（1842）年～弘化４（1847）年
④弘化４（1847）年～嘉永６（1853）年
⑤嘉永６（1853）年～安政５（1858）年
⑥安政５（1858）年～慶応３（1867）年
⑦慶応３（1867）年～明治元（1868）年

3．位置　富津市JA富津支店の南約100mの砂州上。

4．規模　約24,000㎡。規模・構造を具体的に知るものとして、陣屋絵図数点がある（資料①～③他）。

5．歴史　文化７（1810）年、幕府は白河藩に32,000石を房総に割り替えて、江戸湾の警備を命じた。陣屋の建設はかって文化８年と言われてきたが、より下る文政期であろうこと、また、白河藩時代は波左間陣屋の廃材を転用したためか規模・構造の類似が見られる一方、代官時代には縮小したという（文献⑭）。次の忍藩時代には長屋を増築したものの、会津藩時代は大きな変更がなかった。陣屋詰人数は嘉永６年時点の会津藩の場合、家老・番頭各１、組頭２、物頭３、郡奉行１、目付２名以下藩士約170名であった（資料⑧）。また、武器は17貫300目筒１挺を筆頭に、１貫目筒以上12挺・300目～200目玉筒25挺・200目以下筒221挺の他に弓・長柄があった（同資料⑧）。当陣屋の場合、台場も兼ねていたと見え、会津時代の嘉永元年の資料⑨には「大筒三段ニ仕懸ケ見ゆる壱段三四挺有なり其陰にもありといふ火薬蔵もあり常ニ早船繋あり」と見えるが、これは、嘉永３年資料⑥の「周准郡富津砲台試狼烟図」に描かれた富津陣屋図の様子（陣屋西側脇３か所の大筒群）と対応するのであろう。文献⑪には二本松藩時代の様子について、明治10年の丹羽家提出記録（政府修史館宛）に「部将１、隊長５、兵隊300、大砲隊50、軍監２，糧食方33」人、「大砲10」挺の記載が見られ、また、異変之節は「於陣屋喚鐘乱調ニ打鳴し候間、右相図を承り村々打継是迄立花様ニ而申付候通之船并人足足速馳付可申事」とある。下って、慶応４（明治元）年４月、旧幕府軍による富津陣屋接収時には、前橋藩家老小河原左宮がその責任をとって自害し、大砲６挺・小銃10挺・金500圓が引き渡されたという。明治元年９月に取り毀され、同10月には敷地も払い下げられた（文献①・⑮）。富津長秀寺・正珊寺には任期中に没した各藩藩士の墓がある。なお、富津陣屋出張所として、木更津吾妻の浜地に「吾妻出番所」が会津藩時代の嘉永３年に設置された。規模は東西24間・南北32間余、２

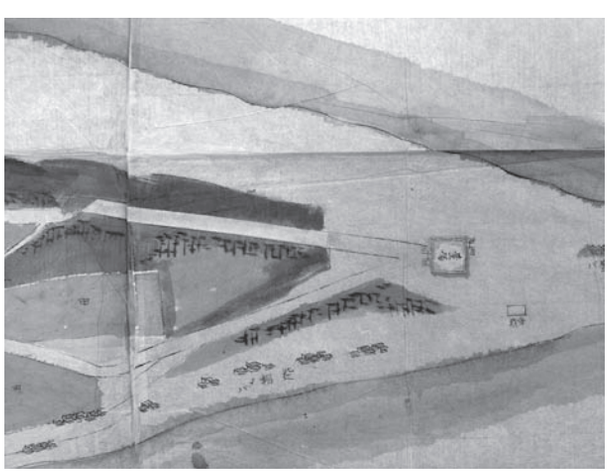
間半×８間の番所に舟が備えられていた（資料⑥遠望図「望陀郡東村」）。

６．関連文献

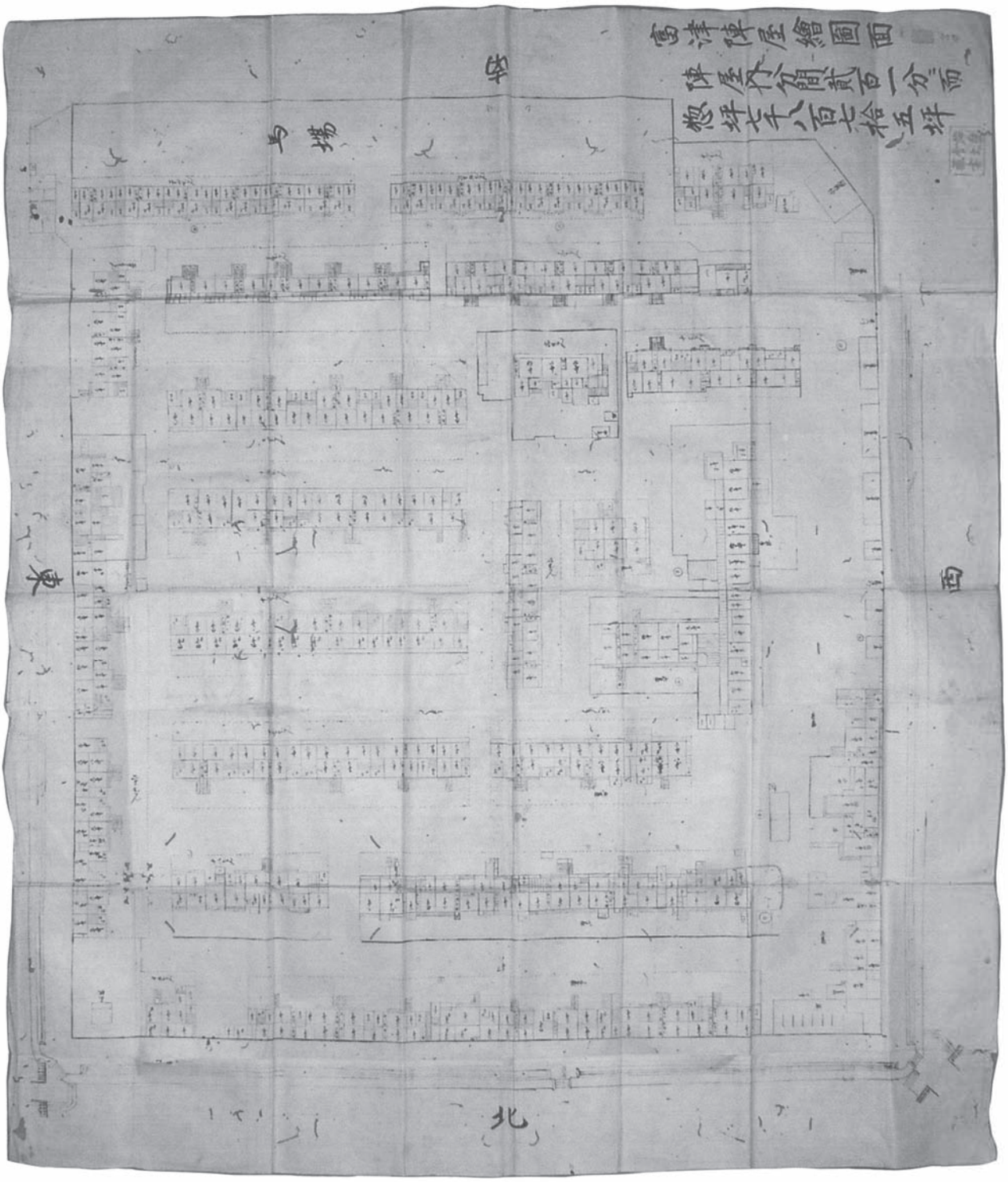
①前橋市　1973『前橋市史』第二巻
②筑紫敏夫　1982「江戸湾沿岸警衛の基礎的考察」『市原地方史研究』第12号　市原市教育委員会
③富津市　1982『富津市史』通史
④相田泰三　1983「房総の守りについて」『会津史談』第56号
⑤筑紫敏夫　1988「江戸湾防備と会津藩主の「房総巡見記」」『房総路』第20号
⑥筑紫敏夫　1988「江戸湾警衛会津藩の「増領」村々について」『房総史学』28号
⑦筑紫敏夫　1989「江戸湾防備と会津藩主の「房総巡見記」・続」『房総路』第21号
⑧筑紫敏夫　1989「白河藩の江戸湾警衛と分領支配（上）『三浦古文化』第46号
⑨筑紫敏夫　1993「陸奥二本松藩の江戸湾防備と預地」『千葉県史研究』創刊号　千葉県
⑩松本　勝　1997『－千葉県富津市－富津陣屋跡発掘調査報告書』（財）君津郡市文化財センター
⑪二本松市　1999『二本松市史』通史編１
⑫会津若松市史　2001『会津若松市史』史料編Ⅲ
⑬松本　勝　2002「江川家文書の富津陣屋・台場絵図面について－静岡県田方郡韮山町江川邸に残る絵図面から－」『君津郡市文化財センター研究紀要Ⅸ』（財）君津郡市文化財センター
⑭筑紫敏夫　2005「近世後期の上総国富津陣屋について」『千葉史学』第46号
⑮筑紫敏夫　2005「前橋藩房総分領と富津陣屋の終焉」『千葉県立中央博物館研究報告－人文科学－』第18号
⑯横須賀市　2005『新横須賀市史』資料編近世Ⅱ（「浦賀史料」）
⑰韮山市　1994『韮山町史』第六巻（下）

７．関係資料

①「富津陣屋絵図面」（織本家文書／文献⑩・⑬）
②「富津村絵図」（織本家文書）＊富津陣屋・砂州先端備場図示
③「富津備場絵図面」（江川家文書／文献⑬所収）
④「狗日記」（『改訂房総叢書』第八巻）
⑤「遊房総記」（『改訂房総叢書』第八巻）
⑥「近海見分之図」（神奈川県立歴史博物館藏）
⑦「海防陣屋図」（船橋市中央図書館蔵）
⑧「松平容敬手扣　房総御備場御用一件」（「会津藩第八代藩主松平容敬「忠恭様御年譜」／文献⑫所収）
⑨「海岸紀聞」（横浜市立歴史博物館蔵）
⑩「富津御台場絵図」（文献⑮）
⑪「松平肥後守様富津御陣屋詰御人数」（文献⑯）

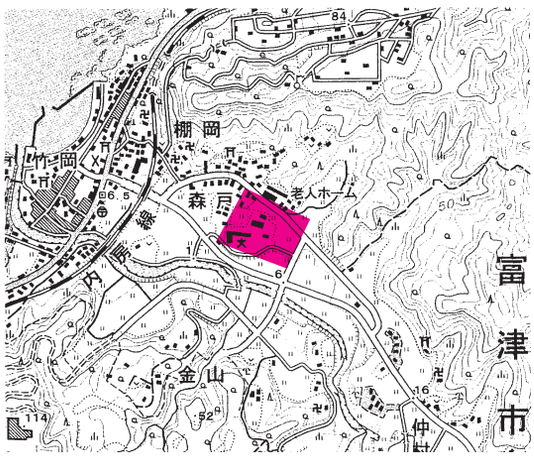


図版112　富津村絵図先端台場部分（資料②）



図版113　富津陣屋絵図面（資料①）

4．【竹ヶ岡（百首）陣屋】富津市竹岡字陣屋／上総国天羽郡竹ヶ岡村



第112図　竹ヶ岡（百首）陣屋の位置

1．藩名　①白河藩：松平定信（さだのぶ）
②幕府代官：森覚蔵（かくぞう）（―羽倉―篠田）
③忍藩：松平忠国（ただくに）
④会津藩：松平容敬（かたたか）
⑤岡山藩：松平慶政（よしまさ）

2．担当　①文化７（1810）年～文政６（1823）年
②文政６（1823）年～天保13（1842）年
③天保13（1842）年～弘化４（1847）年
④弘化４（1847）年～嘉永６（1853）年
⑤嘉永６（1853）年～安政５（1858）年

3．位置　現竹岡小学校敷地一帯。

4．規模　約１町９反、他に牢屋敷・鉄砲稽古場（不動院下）があった（文献③）。嘉永７年時（資料④）と安政６年時（資料⑤）の建物・規模は次ぎの通りである。

〈嘉永７年〉表門（潜門）、本陣（梁間３間・桁行10間半）、西長屋（梁間２間半・桁行40間）、東長屋（梁間２間・桁行40間）、武器蔵（梁間２間半・桁行５間）、武器蔵（梁間２間半・桁行７間）、鎮守（１棟）、煙硝蔵（梁間１間半・桁行１丈）、鉄砲稽古場（梁間２間半・桁行２間）、物置（梁間１間・桁行２間）、垜小屋（１間四方）等

〈安政６年〉表門（潜門）、本陣（縦５間・横11間半、茅葺き、107畳敷）、長屋（縦２間半・横40間）、武器蔵（縦２間半・横５間）、蔵（縦３間・横７間）、鎮守（鹿島・稲荷）、煙硝蔵（縦１間半・横１丈）、塀（364間）等

5．歴史　文化８年に陣屋・台場の普請が開始された。房総白川藩領では百石に付25人、他に役人逗留費用ほかの負担が課せられ、資料①には６月から11月まで普請の記録がみられる。文化９年に名称が百首から竹ヶ岡に変更された。松平定信は田安宗武の七男で吉宗の孫に当たり、白河藩松平氏へ婿入りした。寛政の改革を主導した人物として有名である。文化７年に江戸湾警衛を命じられ、上総２郡・安房３郡内に30,000石余を領地替えされてその任に当たり、百首台場・番所を設置した。文化８年には、老齢に加え病の身をおして担当する陣屋・台場を巡見したが、とうろう坂はついに徒歩ではなく輿による見分となった（資料③）。以後、代官警備―忍藩―会津藩を経て、岡山藩時代の安政５年に廃止となった（富津のみ）。この間の嘉永元年には、松平容敬が房総備場の巡検の際に陣屋へ一泊している。なお、竹岡松翁院・十夜寺他には任期中に没した藩士の墓が多数ある。

6．関連文献

①富津市　1979『富津市史』史料集一
②富津市　1980『富津市史』史料集二
③富津市　1982『富津市史』通史
④筑紫敏夫　1988「江戸湾防備と会津藩主の「房総巡見記」」『房総路』第20号

⑤筑紫敏夫　1989「江戸湾防備と会津藩主の「房総巡見記」・続」『房総路』第21号
⑥筑紫敏夫　1989「白河藩の江戸湾警衛と分領支配（上）」『三浦古文化』第46号

7．関連資料

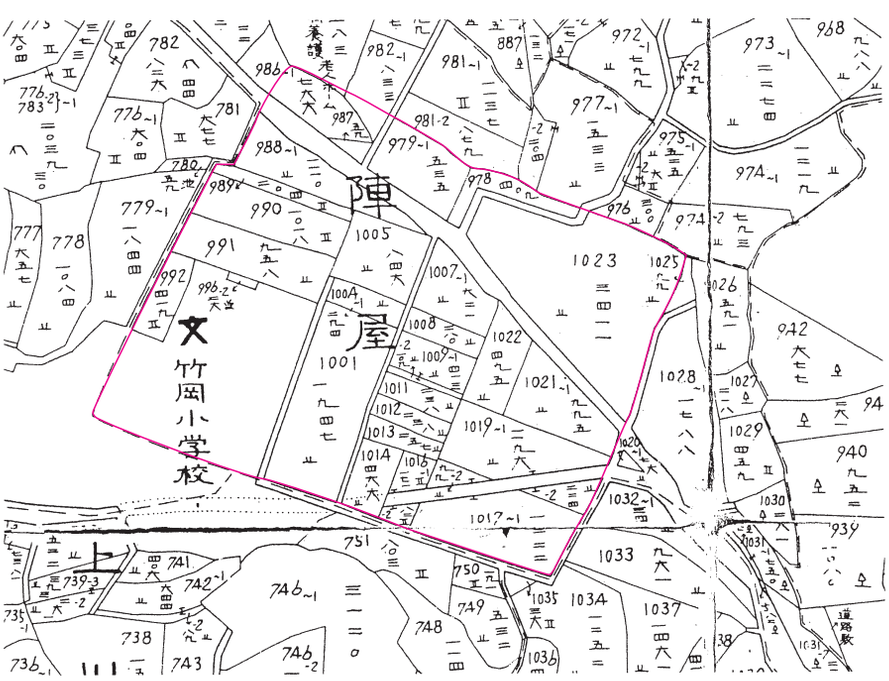
①「黒坂日記（抄）」（文献②）
②「御触書留帳（黒坂日記）」（文献②）
③「狗日記」（『改訂房総叢書』第八巻）
④「上総国竹ヶ岡陣屋目録」（『習志野市史』第三巻史料編Ⅱ）
⑤竹ヶ岡村請書（文献③）

覚
一拾三人　人足岩坂村
右者百首村御陣屋普請ニ付
使申候、以上
六月廿四日　浅見民蔵印
廿七日、百首御普請江人足差
候処、雨天ニ付今日者延引ニ相
成リ帰候、追而御触次第ニ出候
様被　仰付、
七月一日　百首江御普請人足
十五人出ス、
二日　堀田……以下略

「黒坂日記」にみられる普請の記事（部分）

図版114　竹ヶ岡陣屋跡遠景（西から）

図版115　竹ヶ岡陣屋跡付近から台場方面を望む



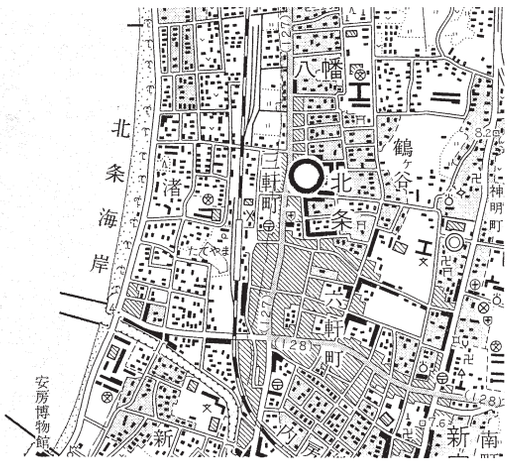
第113図　竹ヶ岡陣屋跡旧状（昭和40年代土地宝典）

5．【北条陣屋（鶴ヶ谷陣屋）】館山市北条字鶴ヶ谷ほか／安房国安房郡北条村

1．藩名　①忍藩：松平忠国（ただくに）
②岡山藩：松平慶政（よしまさ）
③幕府代官：佐々木道太郎

2．期間　①天保13（1843）年～嘉永６（1853）年
②嘉永６（1853）年～安政５（1858）年
③安政５（1858）年～万延元（1860）年

3．位置　後の長尾藩鶴ヶ谷陣屋と重なるかと思われるが（安房高校周辺とも言われる）、正確な位置関係は不明である。



第114図　北条陣屋の位置

4．規模　弘化４（1847）年資料（資料①）では東西２町20間（254m）・南北２町（218m）、安政３（1856）年の資料（資料③）では19,170坪半とある。その差約2,400坪である。

5．歴史　天保13年、武蔵忍藩に江戸湾の警衛が命じられ、新たに安房・上総国内西海岸に忍藩領約30,000石が村替えされた。忍藩時代の姿は資料①に拠れば、竹矢来によって囲まれた方形の区画西側（海側）に向かって門を設け、内部に長屋群が３列に並ぶ状況が垣間見える。西側は松が疎らな砂地であり、同様な景観は嘉永３（1850）年の資料②「安房郡北条村陣営図」でも確認できる。陣屋詰め人数は嘉永６年時点で、家老１名・用人２名・番頭格１名以下21番に及ぶ藩士約110名であった（資料⑤）。忍藩の後は備前岡山藩が竹岡以南の海防陣屋・台場の警備に当たった。その頃の記録（④）には、「北条浜手松原に備前侯陣屋あり。忍藩の旧築なり。ここは本営にて、竹岡に比すれば重役も置かれ、人士も多くして、州崎・大房へ更番することとぞ。表門の構えなど極めて装重にして」と見える。安政５年、海防政策の変更もあり、幕府代官の管理するところとなった。この時点で海防陣屋としての役割は終わったであろうが、長尾藩鶴ヶ谷陣屋との関連上、近江国三上藩時代（安房領約5,300石）まで含めておく。

6．関連文献

①斉藤夏之助　1908『安房志』多田屋書店
②池田和弘　2001『北条村史』
③横須賀市　2005『新横須賀市史』資料編近世Ⅱ（「浦賀史料」）

7．関連資料

①「松平下総守様今般親規御取建御陣屋安房国安房郡北条村御陣屋図」（富永家文書／文献②）
②「近海見分之図」（神奈川県立歴史博物館蔵）
③「安房風土聞書」（千葉県立中央図書館蔵）
④「遊房総記」（『改訂房総叢書』第八巻）
⑤「松平下総守様北条御陣屋詰御人数」（文献③）

図版116　北条陣屋前現状

6．【波左間（はざま）陣屋（松ヶ岡陣屋）】館山市波左間字加賀名下ほか／安房国安房郡波佐間村

1．藩名　白河藩：松平定信（さだのぶ）

2．期間　文化７（1810）年～文政５（1822）年

3．位置　国民休暇村南西の小高い海岸段丘上。

4．規模　文献②所収嘉永６（1853）年資料に拠れば東西83間、南北64間、１町２反２畝13歩とある。通称御屋敷畑。

第115図　波佐間陣屋の位置

5．歴史　文化７年、白河藩に江戸湾の警備が命じられ、上総・安房両国を白河藩が担当することとなった。波佐間陣屋は百首陣屋と同様、翌８年10月には建設されており（資料①）、御殿１棟（12～13間×約５間・長屋建）、長屋９棟、土蔵４棟、馬屋１棟ほかがあった（文献②）。９年には松岡陣屋と改称（松竹梅の松：佳字）されている。文政４年、州崎・波佐間を廃止し竹岡・富津への移転が決まると、陣屋は解体され、「材石、雑具」等は翌５年に富津陣屋へ運ばれた。現地は現在一面の畑地となっており、一部に土手らしき高まりが認められるものの、旧状は窺えない。なお、資料②に拠れば当陣屋に於いて、「大小砲百二十七門」を鋳造し、両台場（州崎・百首）に備えたとする。事実とすれば鋳造遺構の検出が期待される。

6．関連文献

①筑紫敏夫　2005「近世後期の上総国富津陣屋について」『廣文庫』第十一冊

②筑紫敏夫　1989「白河藩の江戸湾警衛と分領支配（上）『三浦古文化』第46号

7．関連資料

①「狗日記」（『改訂房総叢書』第八巻）

②「楽翁公伝」（渋沢栄一　1937）

この時公は松ヶ岡にて、家臣首藤金右衛門俊秀に命じ、越後より召し寄せたる鋳物師を督して、大小砲百二十七門を鋳造せしめられたり、その最も大いなるは「神龍」と称し、長さ一丈、玉目二貫目、西洋の捻万力といふ制に一層の工夫を加えられたるものにして、進退転旋自在なり。之を両台場に備えらる。また、二十櫓にして暴風檄浪にも操縦自在なる軍船二艘を新造し、…（以下略）

「楽翁公伝」の鋳造記事

図版117　波左間陣屋跡近景

7．その他の海防陣屋・番所

【白子（梅ヶ岡）番所】（南房総市白子字元田／安房国朝夷郡白子村

1．藩名　①白河藩：松平定信（さだのぶ）
　　②幕府代官：森覚蔵（かくぞう）（―羽倉―篠田）
　　③忍藩：松平忠国（ただくに）
　　④岡山藩：松平慶政（よしまさ）
　　⑤幕府代官

2．期間　①文化７（1810）年 ～文政６（1823）年
　　②文政６（1823）年～天保13（1842）年
　　③天保13（1843）年～嘉永６（1853）年
　　④嘉永６（1853）年～安政５（1858）年
　　⑤安政５（1858）年～慶応４（1868）年

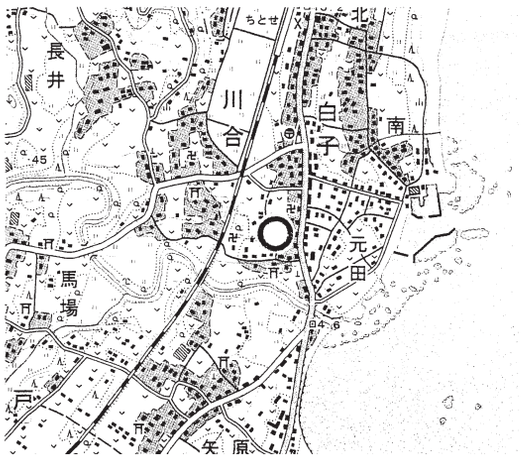
3．位置　顕本寺東側の白子遠見台隣接地

4．規模　不明

5．歴史　文化７年、白河藩時代に遠見番所として築かれた。忍藩時代には北条陣屋の出張番所となったようである。安政元（1854）年１月14日、松平忠固が老中に宛てた異国船出現の一報には「昨十三日申之刻過、安房国白子遠見番所より、辰巳之方に当り、十里程沖合に、異国船壱艘相見」と見える（文献①）。

6．関連文献
　①行田市　1964『行田市史』下巻
　②千倉町　1985『千倉町史』

7．関連資料
　①「徳川実紀」文化７年条



第116図　白子番所の位置

図版118　白子遠見台から太平洋を望む

【串浜遠見番所】（勝浦市串浜字内台／上総国夷隅郡串浜村）

岩槻藩大岡氏が文政８（1825）年～安政期頃（忠固（ただかた）―忠恕（ただのり）―忠貫（ただつら））に渡って設けた番所で、植村氏時代の内台坂之上陣屋に相当すると思われる。現地は高台にあり、海を遠く見渡せる条件にあり、遠見番所としては格好の地である。

第２節　海防台場・砲台

１．【銚子台場群】銚子市川口町二丁目字平磯台ほか／下総国海上郡飯沼村

１．藩名　高崎藩：松平輝聴（てるとし）―輝声（てるな）

２．期間　嘉永４（1851）年～（不明）

３．位置　資料①の「銚子浜磯巡の図」には４か所の「ダイバ」の位置が図示されている。現地とも照応した結果、次の場所と想定される。この他、記録にみえる長崎台場を加えた。

①千人塚台場　千人塚東側の隣接海浜地

②川口台場　川口町１丁目浜地

③長崎台場　長崎鼻

④外川台場　外川漁港背後の丘

⑤名洗台場　名洗集落西側山上

図版119　千人塚台場跡

４．規模　何れも遺構は残存せず、規模等は不明である。

５．歴史　嘉永４年、高崎藩は幕府の指示を受け、藩領の銚子浦各所に台場を設けた。当時、銚子方面では外国船の漂着（茨城県常陸原浜）などがあり、藩では砲術訓練を浜辺で行うなど、緊迫した空気に包まれていた。安政期の文献①には「外川の浜」の項で「海に向かって鉄砲の台場があり、これを「外川の御台場」という」とあり、また、「千人塚」の項では「この塚のそばに鉄砲の台場がある。この付近の人は、これを御台場とよんでいる。」と記している。

６．関連文献

①『利根川図誌』巻６（崙書房1978）

②図書刊行会　1981『銚子市史』再刊版

③高崎市　2004　新編『高崎市史』通史編３近世

７．関連資料

①「銚子浜磯巡の図」「銚子名洗濱の図」（文献①）

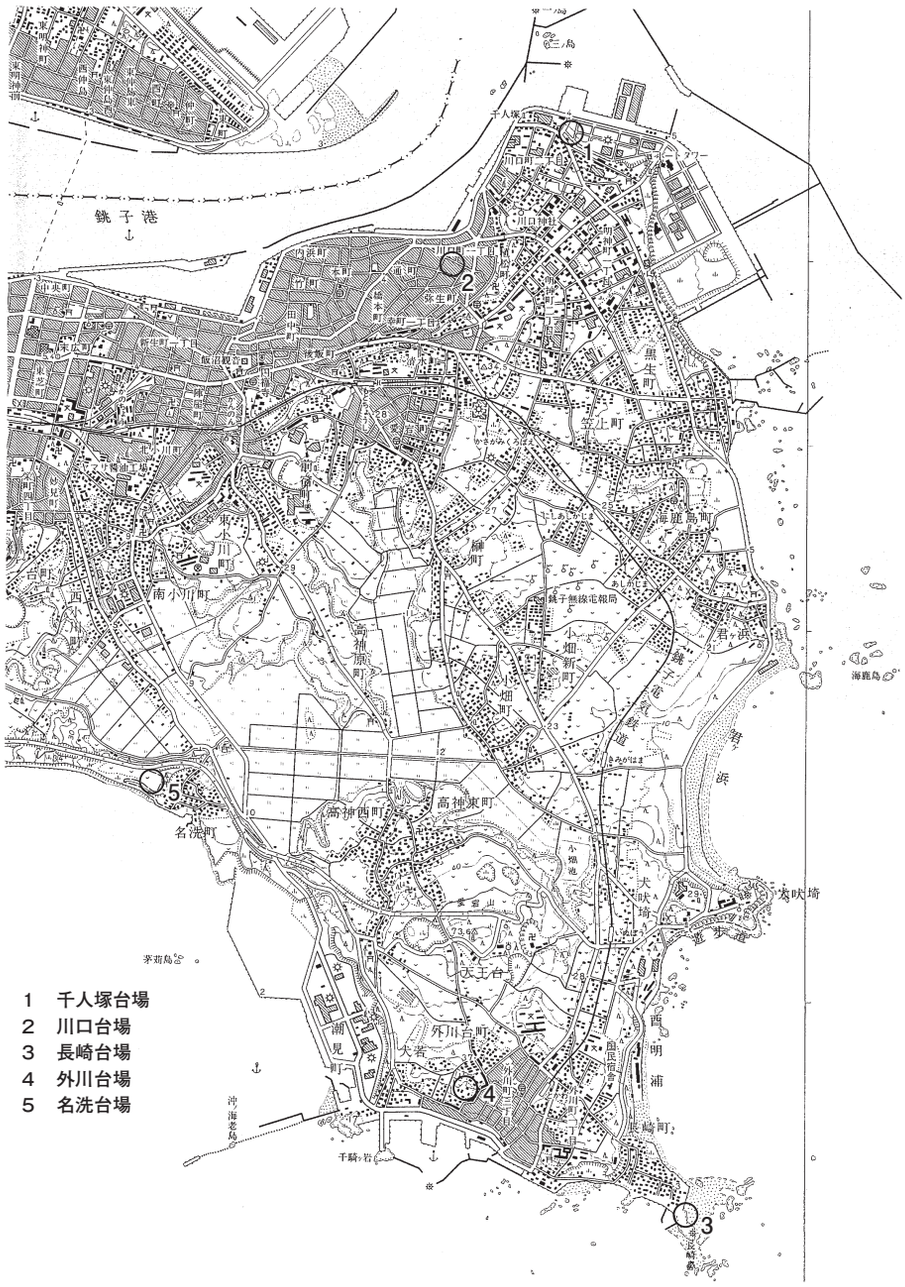
②「玄蕃日記」（個人蔵：写公正図書館）

図版120　川口台場跡

図版121　外川台場跡遠景

図版122　名洗台場跡

図版123　長崎台場跡



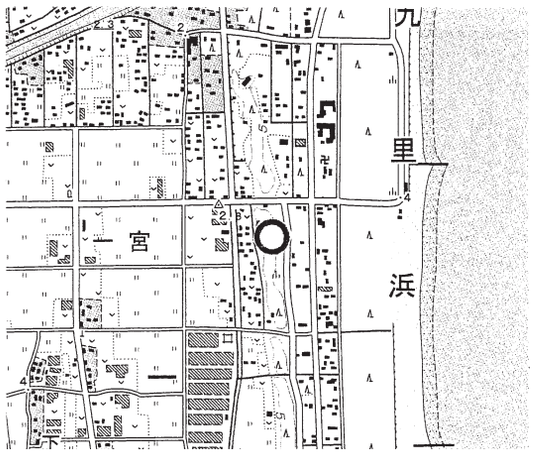
第117図　銚子台場群の位置

2．【一宮台場】一宮町一宮字台場ほか／上総国長柄郡一宮本郷村

1．藩名　一宮藩：加納久恒（ひさつね）―久宜（ひさよし）

2．期間　天保15（1845）年～（不明）

3．位置　一宮町役場を海岸に向かって下った標高５ｍの右手海岸砂丘上。現在、北側から北陣所－物見台－台場－南陣所の字名を残しており、このうち台場は現市川学園一宮学舎南側に相当する。その一角には現在、町指定史跡を示す標識が建っている。



第118図　一宮台場の位置

4．規模　５か所（鱗芝口、蓮谷口、新道口、古道口、神道口）各１門で、炮墩は大体１丈から１丈２尺四方、炮台は南北長さ６間・11間・14間各１か所、７間２か所で、「櫛形」はそれに応じて13間～23間となっている（文献②）。この櫛形とは恐らく形状に由来するもので（半円形）、数字はその外周を指すものであろうか。

5．歴史　天保10年２月の一宮藩の異国船発見時の出張覚（資料①）には「浜手領分境台場迄警衛」として、惣人数58人を記しているが、この台場が何処を指すかは不明である。文献①には天保15年に一宮海岸砂丘上に台場を築き、大筒５挺を備えたとあるが、その根拠は示されていない。台場に設置されていた大筒については、この内の１挺（県指定：全長130㎝・口径６㎝・重さ270kgの鋳鉄製筒）が茂原市郷土資料館に展示されており、そこには違柏紋の家紋と「天保十五辰八月吉辰鋳工増田安治郎藤原重益」の銘が見られる。増田安治郎は川口の鋳物師であり、当時川口の工人が各地に呼ばれて大筒の製造に当たったことは良く知られており、一宮藩でも地元の工房で製作させたのである（茂原高師町釜屋七左衛門）。なお、この大筒であるが、かって３挺あったことが文献①口絵から知ることが出来る。現在も２挺（１挺は個人宅）残っており、貴重な遺産といえる。陣所・台場一帯は昭和30年代まではまったくの松林であったが、現在は民間の別荘地開発も盛んで、往時の面影を失いつつある。

6．関連文献

①一宮町　1991『一宮町史』

②千葉県立総南博物館　1987『一宮町　歴史散歩』

7．関連資料

①「通航一覧続輯」第五巻（箭内健次編　1983）

②一宮台場設置大砲（県指定有形文化財）

図版124　一宮台場跡近景

図版125　一宮台場石碑

3．【大多喜藩領台場群】いすみ市大原字城山ほか／上総国夷隅郡中魚落村ほか

1．藩名　大多喜藩・松平正和―正質

2．期間　（天保期）～（安政期）

3．位置　①八幡山台場・遠見番所　中世小浜城山頂～先端

②魚見台台場・遠見番所　大井集落北側山稜

③荒崎台場・遠見番所　船谷集落北東山稜

④船谷台場・遠見番所　岩和田町場東側山稜

⑤小浜村遠見番所　現大原漁港

⑥菜町遠見番所　岩和田町場北西丘

4．規模　八幡山は浸食により消滅、船谷は記念塔が建ち、僅かに魚見台と荒崎が旧状を残している。この内、魚見台は周囲に土塁が巡る「遠見番屋」地が遺存する。

5．歴史　大多喜藩は夷隅郡内の海沿い村々を藩領としており、天保期には既に幕府の海防対策に応じて伊南陣屋に藩士（「海辺御手当出役伊南勤番」）を派遣している。資料①に拠れば、天保10（1839）年時の台場４か所（小浜八幡山・大井谷魚見台・岩舟大崎・岩和田船谷）と番所２か所（岩和田菜町、小浜村内新場遠見番所）があげられ、前者は毎日二人、後者は一人が詰めて番に当たっていた。作成年代は不明ながら、資料②には「遠見番屋」や「大筒台場」の記載が見え、資料③の「上総小浜砲台　大多喜持」には覆屋の付いた「炮台」も確認出来る。しかし、内房のように土嗅は図示されておらず、難所を越えなければならない山上という条件など、実際に大筒までが配備されたか疑問もある。土塁らしき遺構が遺存する大井谷のような例は、今後の検証が望まれる。

6．関連文献

①大多喜町　1991『大多喜町史』

②大原町　1991『大原町史』史料集Ⅲ

7．関連資料

①『通航一覧続輯』第五巻（箭内健次編　1973）

②「大多喜藩海防絵図」（佐々家文書／文献②）

③「海防台場絵図」（船橋市西図書館蔵）

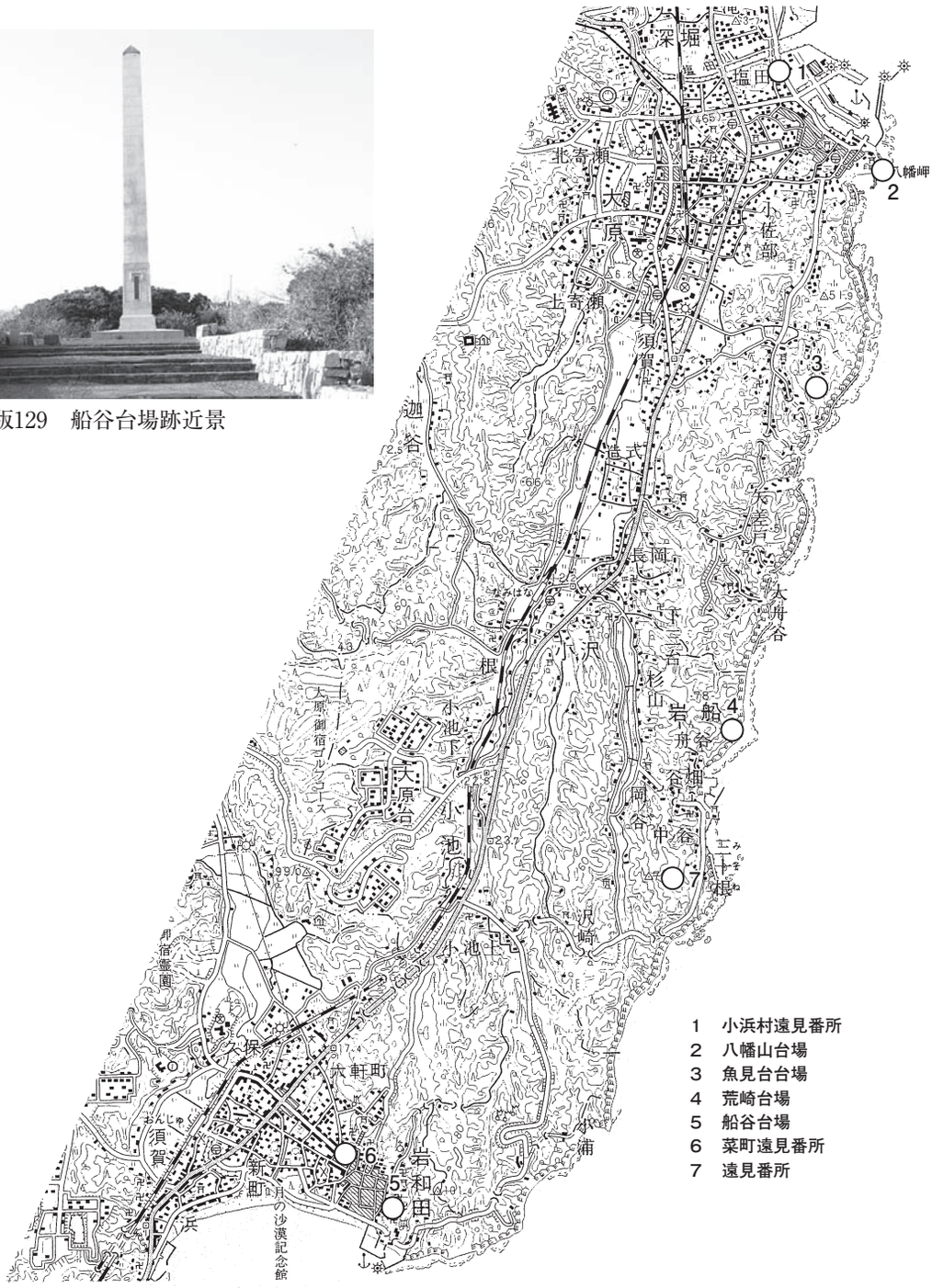
図版126　八幡台遠見番所跡現状

図版127　魚見台遠見番所跡土塁

図版128　荒崎台場跡遠景

＊大多喜藩報告に見られる台場・遠見所の記載
（資料①）
小浜浦字八幡山大筒台場
大井谷浦字魚見台大筒台場
岩舟浦字荒崎大筒台場
岩和田浦字船谷大筒台場
岩和田村字菜町遠見番所
小浜村内新場遠見張所

図版129　船谷台場跡近景



第119図　大多喜藩領台場群の位置（1：50,000）

4.【岩槻藩領台場群（上総国）】鴨川市新官・浜勝浦・松部・吉尾・鵜原・興津／上総国夷隅郡新官村・浜勝浦村・松部村・興津村

1．藩名　岩槻藩・大岡忠固（ただかた）―忠恕（ただのり）―忠貫（ただつら）

2．期間　文政８（1825）年～（安政期）

3．位置　①新官台場　風早山南東中腹

②勝浦台場　八幡崎先端

③弁天ヶ鼻台場　吉尾砂子浦丘陵上か

④鵜原台場　明神崎先端か（ムネ山特定出来ず）

⑤興津台場　弁天崎先端

4．規模　八幡崎、松部については次のように普請が行われたことが明らかながら、岬先端という地形に制約された狭い場所であった。新官は丘陵中腹の谷間、鵜原は大まかな位置を推定するに過ぎず、奥津は海蝕段丘上と思われる。

5．歴史　天保14（1843）年１月、八幡崎台場の普請が開始され、同年５月には完成した（資料①）。既に寛政５（1793）年、松平定信は房総海岸巡視の際に勝浦と百首を見分しており、早くからその重要性が認識されていたのであろう。下って、文政８（1825）年６月、藩では異国船打払令に応じて上総・安房領内を調査の後、上総４か所、安房８か所の台場建設に着手した。上総領内では、北から新官風早山・勝浦八幡崎・松部弁天ヶ鼻・鵜原丸山の４台場であった。これらが実際に建設されたことは、嘉永７（1854）年の岩槻藩房州勤番日記（資料③）から明らかで、更に勝浦については「但八幡崎御台場ニハ切かふ谷・八方谷ト申処二ヶ所有之」、松部については「松部村御台場字さこの浦与申処見分相済、尤同所奥行十二間位表八間位」、また、鵜原・興津についてはそれぞれ「御台場字ムネ山与申処」「弁天崎与申御台場」等、詳細にその場所が記されている。勝浦の場合、資料⑥「上総勝津八幡崎炮台　岩槻持」で見る限り、崎の先端に石垣囲みの２区画が確認され、しかも「八幡崎御台場家根瓦葺直し総漆喰附直し返桟迠」（資料⑦）とあるなど他の台場にはない普請・作事が行われている。これが、天保期と文政期の２回に対応するものかどうかは不明である。岩槻藩の場合、台場とはいっても「木筒台場」と言っているように、その装備は貧弱で、且つ役所内の武器・武具は満足なものがない状況であった。嘉永３（1850）年の幕府役人巡視時かとされる資料⑤では、房州の天面・白子炮台以外は大筒が無いか遠望図といった内容である。

6．関連文献

①引田作蔵　1970『私説　勝浦史』
②鴨川市　1996『鴨川市史』通史編
③岩槻市　1981『岩槻市史』近世史料編Ⅲ藩政史料
④勝浦市　1991『勝浦市史』通史
⑤勝浦市　2004『勝浦市史』資料編近世

7．関連資料

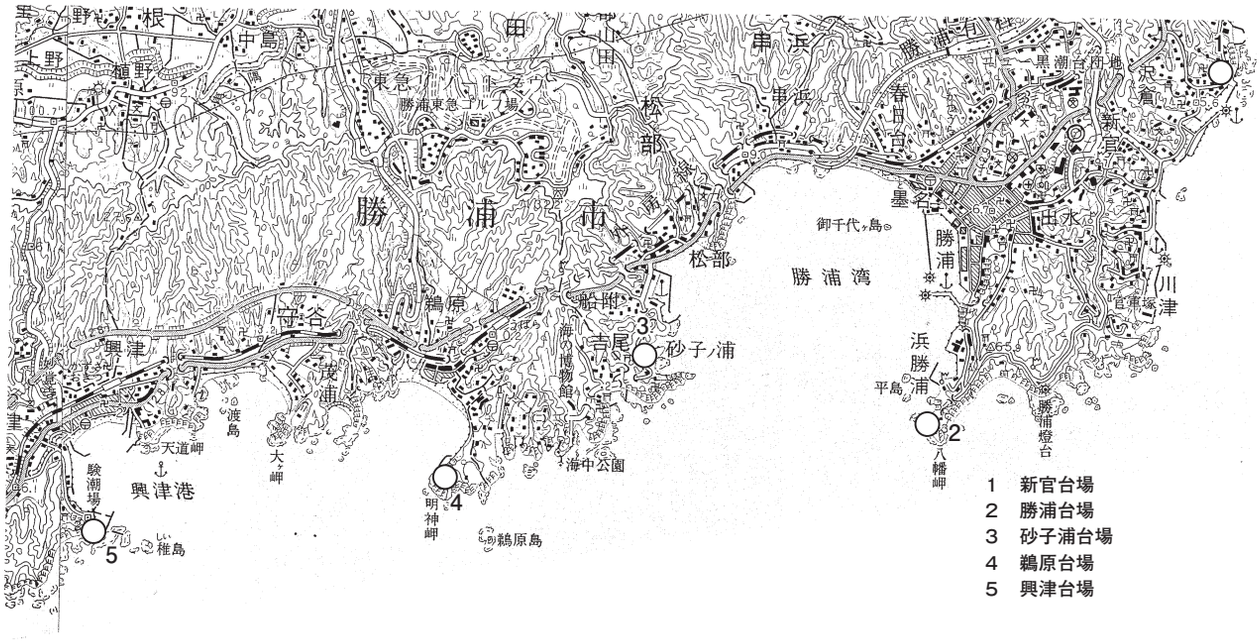
①『通航一覧』第八（清文堂出版　1967復刻）
②「異国船御手当一件留写」（文献⑤所収）
③「総房江勤番中日記」（文献③所収）
④「総房江在勤中諸書附覚」（文献③所収）
⑤「近海見分之図」（神奈川県立歴史博物館蔵）
⑥「海防台場絵図」（船橋市西図書館蔵）
⑦「異国船御手当御入用御勘定帳」（吉野家文書／文献⑤所収）

図版130　新官台場跡近景

図版131　勝浦台場跡現状

図版132　砂子浦台場跡遠景

図版133　興津弁天岬台場跡付近遠景



第120図　岩槻藩領台場群（上総国）の位置（1：50,000）

5．【岩槻藩領台場群（安房国）】鴨川市天津・浜荻・太海・天面、南房総市和田／安房国長狭郡天津村・浜荻村・浜波太村・天面村、安房国朝夷郡和田村

1．藩名　岩槻藩：大岡忠固（ただかた）―忠恕（ただのり）―忠貫（ただつら）

2．期間　文政８（1825）年～（安政期）

3．位置　①大浦台場　松ヶ鼻崎付近か
②天津（あまつ）台場　中世天津城東山麓
③浜荻（はまおぎ）台場　中世浜荻城跡南麓か
④前原（まえばら）台場　潮さい公園一帯
⑤横渚（よこすか）台場　位置不明
⑥浜波太（はまなぶと）台場　仁右衛門島か
⑦天面（あまつら）台場　天面漁港東側段丘面上
⑧和田（わだ）台場　和田漁港東側段丘上

図版134　天津台場跡近景

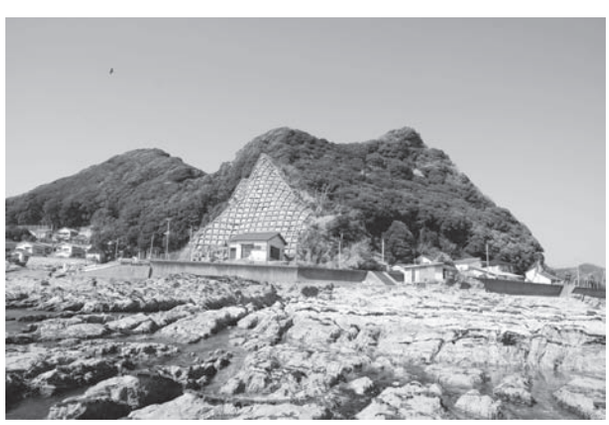
4．歴史　既に岩槻藩上総分で述べたところから重複は避け、資料①には安房領内で、北から内浦村大浦、天津村川脇、浜荻村中西町、前原町□□台、□□□□町古余瀬、天面村めうと、浜波太村島之台、和田村馬場の８か所が上げられている。一方、資料②では「波太島・天面・和田村迄御台場」「天面御台場見分、右御台場より左之方砂浦サイノカワラ、此辺小石積有之」「浜荻村御台場」「（天津村）同所御台場」の５か所が見られるが、大浦、前原、古余瀬の名は見られない。大浦は内浦湾口、古余瀬は貝渚であろうが、現在は該当する字名もない。また、前原は陣屋の脇であるから敢えて見回りの対象にならなかったのかもしれない。資料⑤によってその位置や遠見台・炮台の関係が明瞭である。因みに、見回りに当たっては、「明日天気ニ候得ハ貝渚・余瀬町より波太島・天面・和田村迄御台場為見分罷出申候旨、大目付・御物頭・御給人・御詰合之者一同江相達申候」とあって、その管理体制の一端を知ることが出来る。資料③にはこの内の浜波太、天面、和田の３か所、資料④には同天面、和田の２か所が載せられており、和田台場については石垣また土塁巡りという点で一致する。なお、天面台場のサイノカワラについては現在もその面影がある。

5．関連文献

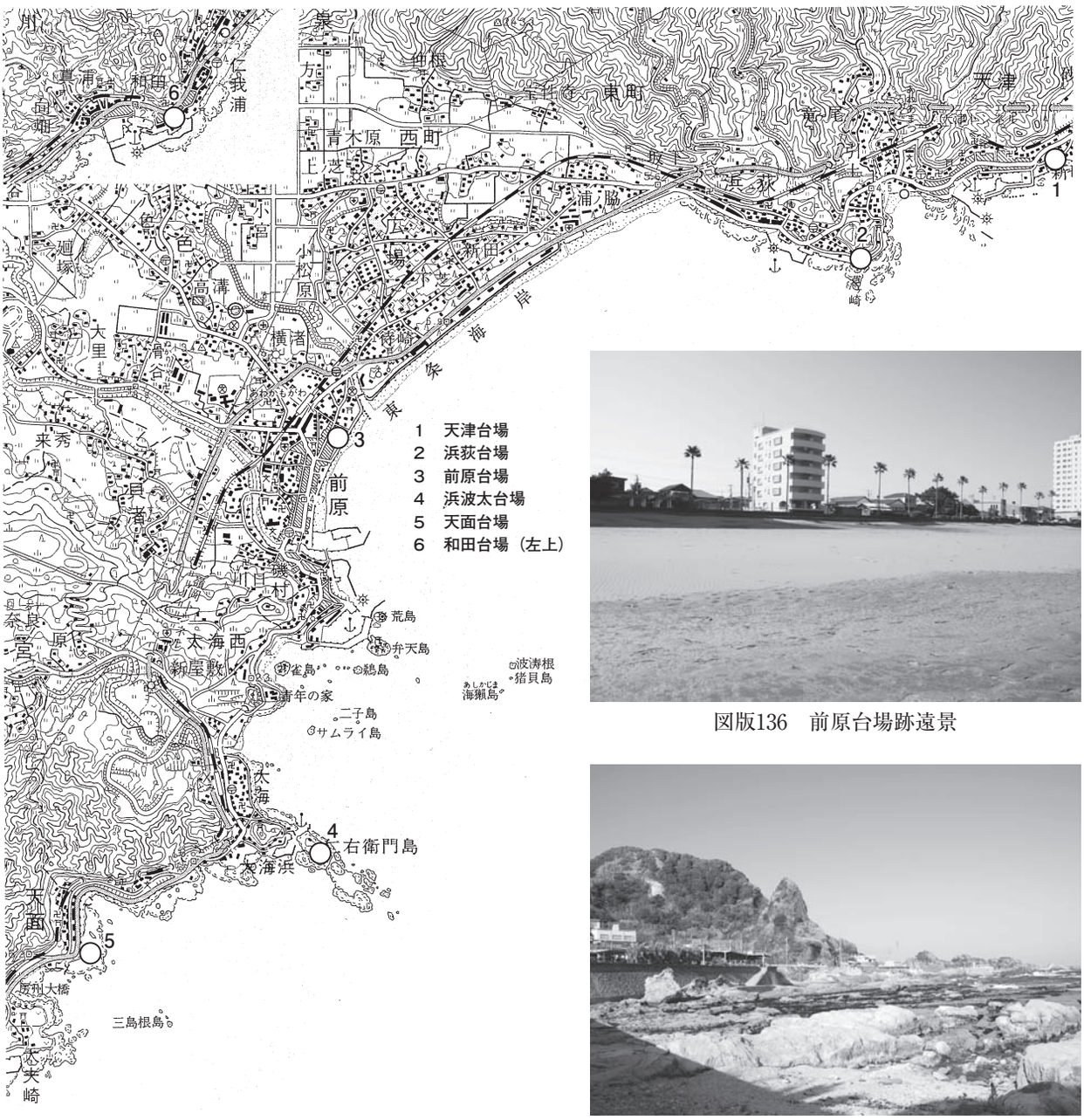
①引田作蔵　1970『私説　勝浦史』
②鴨川市　1996『鴨川市史』通史編
③勝浦市　1991『勝浦市史』

6．関連資料

①「異国船御手当一件留写」（文献③所収）
②「総房江勤番中日記」（『岩槻市史』近世史料編Ⅲ藩政史料下）
③「近海見分図」（神奈川県立歴史博物館蔵）
④海防台場絵図（船橋市西図書館蔵）
⑤弘化２年横渚村・前原町絵図（個人蔵）



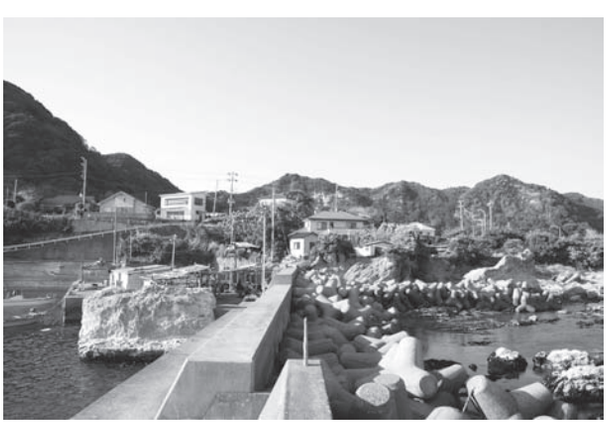
図版135　浜荻台場跡近景



第121図　岩槻藩領台場群（安房国）の位置（1：50,000）

図版136　前原台場跡遠景

図版137　浜波太台場跡遠景

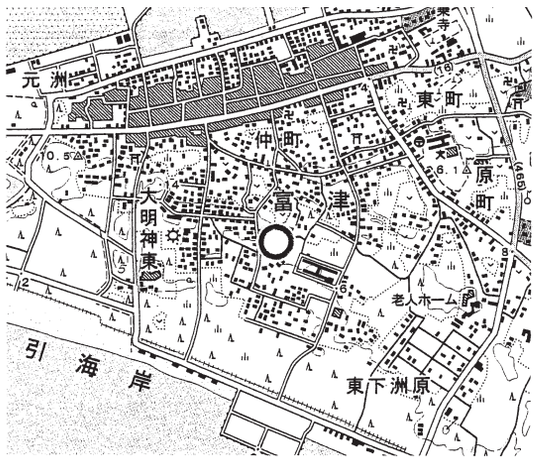


図版138　天面台場跡遠景

図版139　和田台場跡近景

6.【富津台場】富津市富津内／上総国周淮郡富津村

1．藩名　①白河藩：松平定信（さだのぶ）
　②幕府代官：森覚蔵（かくぞう）―羽倉外記―篠田藤四郎
　　―田中一郎右衛門
　③忍藩：阿部忠国（ただくに）
　④会津藩：松平容敬（かたたか）―容保（かたもり）
　⑤柳川藩：立花鑑寛（あきひろ）
　⑥二本松藩：丹羽長富（ながとみ）
　⑦前橋藩：松平直克（なおかつ）



第122図　富津台場の位置

2．期間　①文化８年（1811）年～文政６年（1823）
　②文政６（1823）年～天保13（1842）年
　③天保13（1842）年～弘化４（1847）年
　④弘化４（1847）年～嘉永６（1853）年
　⑤嘉永６（1853）年～安政５年（1858）
　⑥安政５（1858）年～慶応３年（1867）
　⑦慶応３（1867）年～慶応４年（1868）

3．位置　文献②では「台場跡と思われる場所は「御手植の松」周辺の小高い場所と推定」されるとしているが、現京急富津観光ホテル付近に比定する考えがある（文献③）。

4．規模　嘉永３年資料②には方形の土壇西側に大筒７挺が図示されている。安政４年資料③（柳川藩時代）には「東西二十間程、南北四五間、石壁、瓦屋」と具体的にその規模を記しており、陣屋の約1/8程の面積であった。一方、州の先端の台場、即ち「台場の西二、三町の水際に土壇、大砲７門」については規模までは不明である。

5．歴史　「富津御台場」・「新御台場」とも称された。弘化３年の資料（資料①）では、「御台場海岸仕掛」で８挺、「同所多門仕掛」で11挺の配備（他に船仕掛け有）が確認される。弘化４年、忍藩から会津藩への引継ぎは同年８月に「富津南台場居小屋引渡交替之式」が行われ、一緒に「陣屋御台場附鉄砲二貫目一挺、一貫目一挺、百目一挺置附引渡」されたという（資料④）。一方、翌年の資料⑤に拠れば、嘉永元年５月１日条に「富津御台場御普請ニ付罷出候人足、今朝四ツ時帰ル」とあり、同年４月中にも台場の建設があった。これは資料④でも確かめられ、約１貫目～２貫目筒７挺を配置したとある。この台場はもちろん富津台場のことであろうが、富津の場合、代官時代に築かれた砂州先端（出洲：資料⑦）の他に陣屋脇の台場もあり、時代によって筒数も異なるなどその具体的な増設・改築年代等について必ずしも整理出来ているわけではない（この点、富津陣屋の項参照）。その後（会津・柳川藩時代）の台場の規模・構造等については上にあげた通りであるが、資料⑥には二本松藩時代の御台場（大筒多聞・覆屋、詰所、番所）と新御台場（大筒覆屋列）の状況が窺える。最後の前橋藩はそれまで江戸湾奥の台場警備を担当していたが、慶応３年に富津陣屋・台場の警備を命じられ、同４年には接収・廃止された。

6．関連文献

①富津市　1980『富津市史』史料集二

②富津市　1982『富津市史』通史

③松本　勝　2002「江川家文書の富津陣屋・台場絵図面について」『研究紀要Ⅸ』（財）君津郡市文化財センター

④会津若松市　2001『会津若松市史』資料編Ⅲ

7．関連資料

①「房総州御備場・備人数幷武器」（『浦賀奉行所史料第一集　臼井家文書』）

②「近海見分之図」（神奈川県立歴史博物館藏）

③「遊房総記」（『改訂房総叢書』巻八）

④「松平容敬手扣　房総御備場御用一件」（「会津藩第八代藩主松平容敬「忠恭様御年譜』／文献④）

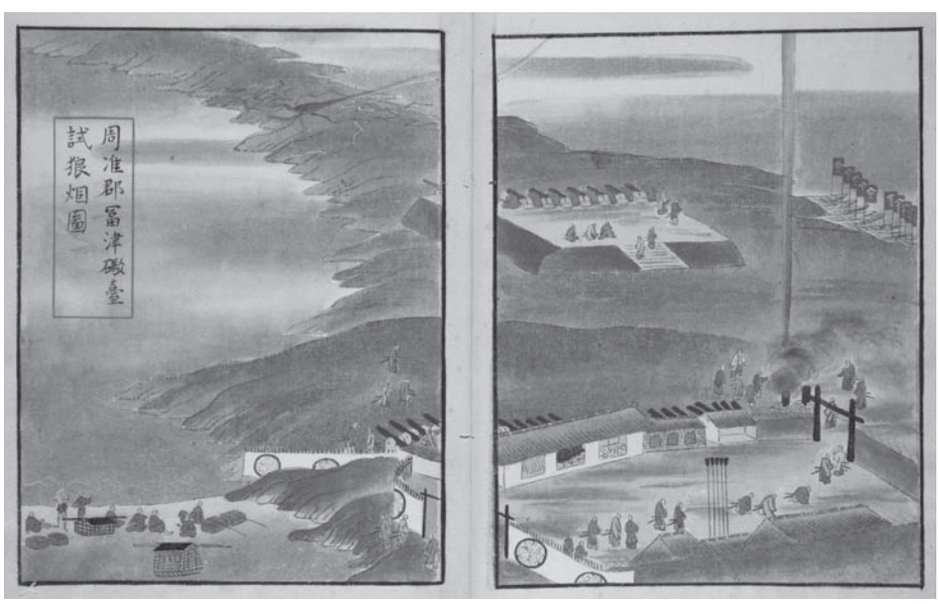
⑤「御触書留帳」（文献①）

⑥「富津御台場絵図」（『二本松市史』通史編１）

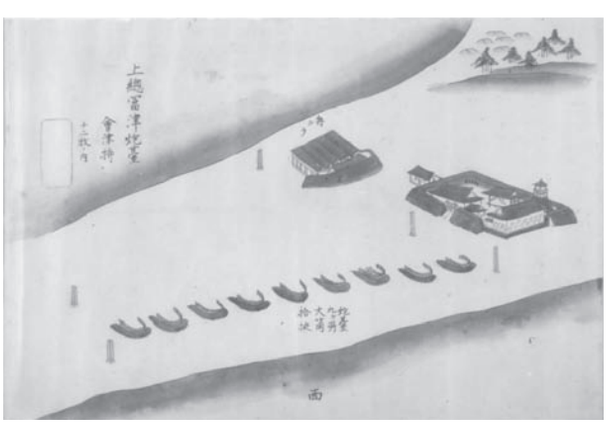
⑦江川太郎左衛門「見分復命書」（『韮山市史』第６巻下）

⑧「富津村絵図」（織本家文書）

⑨房総台場絵図（船橋市西図書館蔵）



図版140　「周准郡富津炮台狼煙図」（資料②）



図版141　「上総富津炮台会津持」（資料⑨）

図版142　富津出洲台場跡近景

7．【竹ヶ岡台場】（百首台場・平夷山台場）富津市造海字城山ほか／上総国天羽郡百首（竹ヶ岡）村

1．藩名　①白河藩：松平定信

②幕府代官：森覚藏―羽倉外記―篠田藤四郎―田中一郎右衛門

③忍藩：阿部忠国

④会津藩：松平容敬―容保

⑤岡山藩：池田慶政

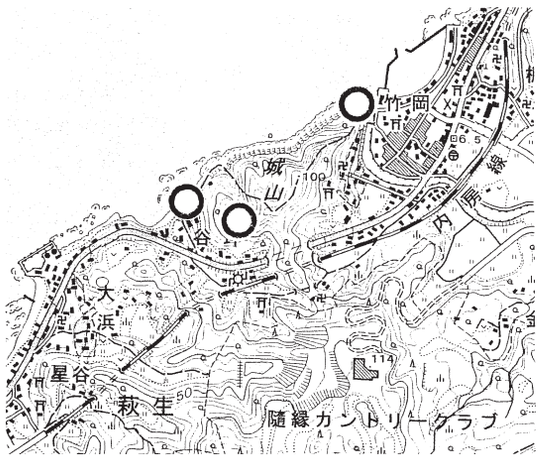
2．期間　①文化８（1811）年完成？～文政６（1823）年

②文政６（1823）年～天保13（1842）年

③天保13（1842）年～弘化４（1847）年

④弘化４（1847）年～嘉永６（1853）年

④嘉永６（1853）年～安政５（1862）年



第123図　竹ヶ岡台場の位置

3．位置　中世造海城跡山上及び山麓。

4．規模　山上は山頂に監視所・西側中段に炮台、山麓は東側と西側海際にそれぞれ１か所の炮台があった。

5．歴史　資料①に拠れば、文化８（1811）年６月、百首「御台場并御陣屋御普請ニ付、地形方入用人足之儀…高百石ニ付弐拾五人」の割合で普請人足が会津藩領の村々に割り当てられた。この台場が中世百首城跡の台場に相当するものと思われる。資料②には、「百首城山新藏（造）御台場　地形普請坪数弐百六拾七坪四歩」、とあり、西側は伊豆石で石垣を築き、大蔵・箱番所・大筒居場雨屋、丸太柵を建てたというから、城跡南西中腹の平場（上之御台場）が該当するのであろう。嘉永３（1850）年の資料⑨には、「上御台場」と「下御台場」が確認される。下の台場は南西山麓の石津浜の他に城跡北側山麓十二天社先にも一炮台があり、こちらは十二天の鼻砲台と呼ばれた。下之御台場群である。会津藩時代の藩主巡視資料④に拠れば、上ノ台場で３挺、下ノ台場で５挺、それに山上に１挺が配置され、挿絵から煙硝蔵、貴舟社それに番所らしき建物も確認される。この点は資料⑤の内の「上総竹ヶ罡炮臺」も同様であり、文献⑧に拠れば、嘉永７年の会津から岡山藩への引継事項として、具体的に番所・多聞（煙硝蔵）の規模（４間×４間、３間×７間）と木戸の数（４か所）が記されている。安政４（1857）年の資料⑥には平夷山台場の他として２か所にふれていることから、この頃には３者共に存在したことがわかる。嘉永４年には竹岡下ノ台場へ「是迄ニ無之大銃」ホンベカノン炮が置かれ試射もなされているが（資料④）、是は嘉永元年の旅行記に見える石津浜砲台下に設けられた「ボンヘン筒」（資料③）であろうか。現存する「土嗽」からすると、十二天の鼻・上ノ台場共に４挺（土嗽５）が想定されるが、恐らくこれが最終の姿なのであろう。ちなみに石津浜の最終段階は岡山藩時代の絵図がある（炮４挺：資料⑦）。山頂には遠見番所があり、狼烟のための木炮も備えられていたらしい。なお、百首と平夷山の相違であるが、これは夷敵を平伏させる意味を込めて文化９（1812）年に名称が変更されたに過ぎない。

6．関連文献

①小野正端　1857「遊房総記」

②富津市　1979『富津市史』史料集一

③富津市　1980『富津市史』史料集二

④富津市　1982『富津市史』通史

⑤相田泰三　1983「房総の守りについて」『会津史談』第56号

⑥原　剛　1988『幕末海防史の研究』

⑦筑紫敏夫　1988「江戸湾警衛会津藩の「増領」村々について」『房総史学』28号

⑧筑紫敏夫　1989「江戸湾防備と会津藩主の「房総巡見記」・続」『房総路』第21号

⑨筑紫敏夫　1989「白河藩の江戸湾警衛と分領支配（上）」『三浦古文化』第46号

⑩会津若松市　2001『会津若松市史』史料編Ⅲ

⑪小高春雄　2010『君津の城』

7．関連資料

①「御触書留帳」（文献③）

②「百首台場普請見積」（文献②）

③「海岸記聞」（横浜市立歴史博物館蔵）

④「松平容敬手扣　房総御備場御用一件」（「会津藩第八代藩主松平容敬「忠恭様御年譜」」／文献⑩）

⑤「海防台場絵図」（船橋市西図書館蔵）

⑥「遊房総記」（『改訂房総叢書』第八巻）

⑦「上総国金谷村之内石津浜御台場之図」（岡山大学付属図書館蔵／文献⑥）

⑧「上総国竹ヶ岡御台場図」（文献⑦模写図）

⑨「嘉永３戌年近海御備向見分」（『陸軍歴史Ⅱ　勝海丹全集12』）

図版143　百首台場跡遠景（北から）

図版144　石津浜台場跡石垣

図版145　十二天の鼻台場跡近景

8．【七曲台場】富津市小久保字七曲／上総国周淮郡小久保村

1．藩名　①会津藩：松平容敬—容保

②柳川藩：立花鑑寛

2．期間　①弘化年間～安政元（1854）年

②安政元（1854）年～（不明）

3．位置　資料②弘化５（1848）年時の項には、「磯根崎大銃備場之儀者小久保村ヨリ七曲江行向候海道之行止ニ而」と見える。今の七曲山海側の中腹平場が該当すると思われる。

第124図　七曲台場の位置

4．規模　現在、海側の中腹には南北20m・東西60m程の平場が遺存し、これは明治10年代の迅速図でも確認出来る。

5．歴史　文献①に拠れば、嘉永３（1850）年頃に会津藩が「大砲６門」を据え付けたが、安政元年には引き払い、船積みして江戸に送ったと記してある、とする。会津藩が房総備場警備を命じられたのは弘化４年２月であるから、この間に築造されたとも考えられる。嘉永３年時の「大砲」とはその後に備えられたのであろうか。なお、七曲山とはその名の通り脊梁が蛇のように曲がりくねっていることに由来するのであろう。柳川藩時代に渡っているかどうかわからないが、そこまで含めておく。

6．関連文献

①富津市　1982『富津市史』通史

②会津若松市　2001『会津若松市史』史料編Ⅲ

7．関連資料

①「松平容敬手扣　房総御備場御用一件」（「会津藩第八代藩主松平容敬「忠恭様御年譜」」／文献②）

②「小久保村名主丸勘解由日記」（文献①）

図版146　七曲台場跡

図版147　七曲台場跡から横須賀方面を見る

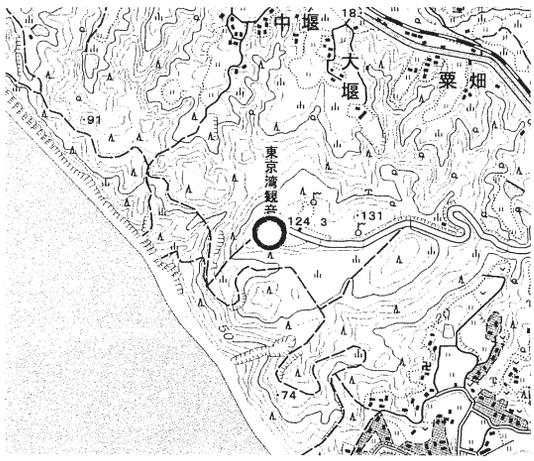
9．【大坪山台場】富津市亀田字大坪山ほか／上総国天羽郡亀田村

1．藩名　佐貫藩：阿部正身—正恒

2．期間　天保13（1842）年～（明治元年）

3．位置　文献②に拠れば、金谷石で築いた台場跡が東京湾観音の南東に存在したが、東京湾観音に通じる尾根道開通のため削平されたという。

4．規模　資料②の「上総天羽郡大坪村砲台」には小高い山稜に陣幕を張り、見張所また詰所らしき建物と江戸湾に向けた砲４門が描かれている。また、文献③には「かって土塁があったが消滅」ともされる。



第125図　大坪山台場の位置

5．歴史　通称すりばち山。文献①には「佐貫町亀田大坪山に在り、天保十三壬寅年佐貫城主阿部駿河守正身大坪山の西南部へ砲台を築き大砲五門を据え戍兵を置き海防に備へたりといふ」とある。また、嘉永２（1849）年の資料①には阿部家の持場の水面より行程２丁斗りの山上にあって大筒３挺ありと記されている。なお、番小屋は明治初年に学校の用材として使われたようである（文献②）。現在、台場らしき付近は東京湾観音敷地となっている。

6．関連文献

①君津郡教育会　1927『千葉県君津郡誌』下巻

②富津市　1982『富津市史』通史

③千葉県教育委員会　1996『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ—旧上総・安房国地域—』

7．関連資料

①「海岸記聞」（横浜市歴史博物館蔵）

②「近海見分之図」（神奈川県立歴史博物館蔵）

図版148　大坪山台場跡現状（左側は東京湾観音）

図版149　大坪山から七曲山を望む

10.【大房崎台場】南房総市多田良字大武佐ほか／安房国平郡多田良村

1．藩名　①忍藩・松平忠国

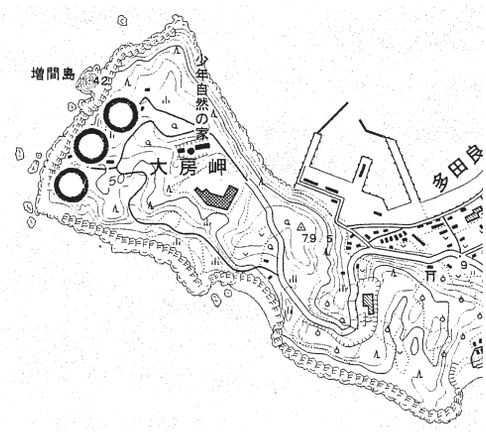
②岡山藩・松平慶政

2．期間　①天保13（1842）年～嘉永６（1853）年

②嘉永６（1853）年～安政５（1858）年

3．位置　現南房総市富浦の大房崎先端。

4．規模　大房崎先端の谷部（三之台場）、その上段海側（弐番台場）、さらにそれから少し離れた高所海側（壱番台場）の計３か所に設置された（各名称は資料③による）。



第126図　大房崎台場の位置

5．歴史　天保13年から、忍藩は幕府代官に替わって房総御備場御用を命じられ、その任に当たっていたが、弘化４（1847）年、新たに会津藩が加わることなり、忍城主松平忠国が会津藩主松平容敬に送った引継ぎの通達には「其方領分房州大房崎江新規台場取建候積、尤此度限公儀御普請ニ可被成下候」とあり、忍藩時代に築かれたことがわかる（資料①）。大房のある多田良村は山名村に陣屋を置いていた旗本三枝氏の領地であったが、岬付近は会津領になっていたのであろうか。嘉永３年の資料④では一～三の御台場まで計13門を記しており、文献①でも「大砲13門」として図を含め掲載しているが、出典は明らかでない。恐らく、岡山藩時代かと思われる資料②の炮台絵図では置かれた大炮は、下段から２、３、７門の順である。忍藩の後は岡山藩が継いだが、安政５年、富津台場を残して他の台場と共に廃止となった。なお、各台場の大きさ、土手・石積の有無は資料③によって知ることができる（忍藩時代）。

6．関連文献

①富浦町　1998『富浦町史』

②会津若松市　2001『会津若松市史』史料編Ⅲ

7．関連資料

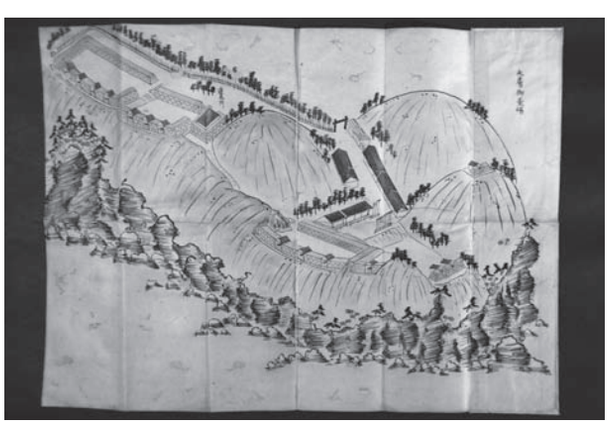
①「松平容敬手扣　房総御備場御用一件」（文献②）

②「大房御台場図」（館山市立博物館蔵）

③「大房崎御台場筒処附御引渡目録」（『習志野市史』第三巻史料編Ⅱ）

④「嘉永三戌年近海御備向見分（『陸軍歴史Ⅱ　勝海丹全集12』）

図版150　大房岬台場跡最上段近景



図版151　「大房御台場図」（資料②）

11.【州崎（勝崎）台場】館山市州の崎字漂ノ浜ほか／安房国安房郡州の崎村

第127図　州崎台場の位置

1．藩名　①白河藩：松平定信
②忍藩：松平忠国
③岡山藩：池田慶政

2．期間　①文化７（1810）年～天保13（1843）年
②天保13（1843）年～嘉永６（1853）年
②嘉永６（1853）年～安政５（1858）年

3．位置　現州崎灯台西側の岬突端に当たる小高い平地。明治19年の文献①には「州崎村ノ西端ニ在り…遺礎今ニ至テ存ス」とある。

4．規模　嘉永３（1850）年資料③に「州之崎砲台試大煩図」として炮５門と石垣を巡らした詰所が見える。一方、安政４（1857）年資料④には砲墩と覆屋、それに周囲は柵囲みで、南側中腹には平地と建物群が見られる。年代は不明ながら（弘化６年頃か）、資料⑤も基本的に同様で（砲墩のみ、柵無し）、南側山麓浜辺に船屋３棟が描かれている。台場詰の漁船であろう。

5．歴史　文化７年、会津藩と共に江戸湾の防備を命じられた白川藩は、翌８年に州崎台場の建設に着手し10月には完成した。藩主自ら完成した陣屋等を巡見した資料①（同年陰暦霜月条）には「州の崎の台に行きしが、思いしよりもよく造りなせり」と記されている。その後幕府の政策の変更もあり、文政４年には台場は解体され、翌５年に台場築材等が富津へ搬送され、富津から番士のみが派遣された。しかし、白川藩に変わって忍藩が担当になると、再び整備されたようで（州之崎遠見番所）、嘉永期以降の絵図はその状況を示しているのであろう。なお、勝崎とは白河藩時代に付けられた一連の改称によるもので、当時は「州之崎沖」また「勝崎御台場」というように使い分けられていたが（資料②）、その後は州之崎に戻ったようである。

6．関連文献

①近藤活版所　1886『大日本国誌　安房第三巻』（内務省地理局蔵版）
②斉藤夏之助　1908『安房志』多田屋書店
③筑紫敏夫　2005「近世後期の上総国富津陣屋について」『千葉史学』第46号

図版152　洲崎台場跡遠景

7．関連資料

①「狗日記」（『改訂房総叢書』第八巻）
②「総州平夷山出張日記」（『白河市史』近世Ⅱ資料編４）
③「近海見分之図」（神奈川県立歴史博物館蔵）
④「炮台縮図絵巻」（館山市立博物館蔵）
⑤「安房国州崎炮臺　忍持十二枚ノ内」（船橋市西図書館蔵）
⑥「遠見番所箇所附御引渡目録」（『習志野市史』第三巻史料編Ⅱ）

12.【安房・朝夷両郡台場群】（州崎・和田別途）館山市川名・伊戸・布良、南房総市滝口・忽戸・白子／安房国安房郡伊戸村・布良村・滝口村、朝夷郡忽戸村・白子村

1．藩名　①忍藩：松平忠国（ただくに）
　　②岡山藩：松平慶政（よしまさ）

2．期間　①天保13（1843）年～嘉永６（1853）年
　　②安政元（1854）年～同５（1858）年

3．位置　①川名（かわな）台場　川名集落南側浜辺か
　　②伊戸（いと）台場　伊戸集落南西の海岸段丘上
　　③布良（めら）台場　富崎漁港北側の海岸段丘面上
　　④滝口（たきぐち）台場　長尾川左岸河口左手の浜辺
　　⑤忽戸（こつと）台場　忽戸大浦港北浜辺
　　⑥白子（しらこ）台場　白子漁協先浜辺

図版153　伊戸台場跡近景

4．規模　何れも海岸に面した砂浜や丘に設けられ、資料②絵図で見る限り土嗷と柵程度の簡略な施設であったようである。それゆえ、規模については見聞記や絵図に見える筒数：①２、②３、③３、④２、⑤３、⑥３（丸数字は３．位置に対応）を記すにすぎない。但し、絵図自体そもそも絵師が随行せず（房総側資料群④にも絵師記載無し）、その信憑性を疑問視する考えもあるが（文献③）、実際に現地を訪れた感想からすると、何らかの下地や情報があったものと思われる。

5．歴史　弘化３（1846）年時の台場備炮一覧（資料①）には富津、竹ヶ岡、州崎、白子が見えるのみながら、嘉永３（1850）年に勘定奉行石河政平、西ノ丸留守居筒井政憲等15名が江戸近海の警備状況を視察した資料かと推定されている資料②には、安房・朝夷郡管内の台場（岩槻藩管轄除外）として、「州之崎炮台」・「伊戸村炮台」・「布良村炮台」・「滝口村炮台」・「忽戸村炮台」・「白子村炮台」の６か所を載せている。即ち、この間に徐々に整備されていったのだろう。安政４年の資料③には「川名村、炮墩小屋あり。大銃二門架せり。亦備前侯持なり。」また「是より布良迄…備前侯の炮墩あり。」と見え、前者は伊戸の可能性もある。後者は布良台場に比定される。

6．関連文献

①千倉町　1985『千倉町史』
②原　剛　1988『幕末海防史の研究』
③鶴岡明美　2008「神奈川県立歴史博物館蔵「近海見分図」について：幕末の海防と実景表現」お茶の水女子大学『人間文化創世科学論叢』11

7．関連資料

①「房総州御備場・備人数幷武器」（『浦賀奉行所史料第一集　臼井家文書』下巻」横須賀史学研究会編）
②「近海見分之図」（神奈川県立歴史博物館蔵）
③「遊房総記」（『改訂房総叢書』巻八）

図版154　布良台場跡近景

④「西海岸御巡見御触書」（『君津市史』史料集Ⅱ近世Ⅱ）・「海岸御見分人馬写帳京田村控」（『鴨川市史』史料編（一）近世）等

⑤忽戸区有文書（台場普請の記載）

図版156　忽戸台場跡近景

図版157　白子台場跡近景

図版155　滝口台場跡近景

第128図　布良台場・滝口台場の位置（1：50,000）

第129図　川名台場～忽戸台場の位置（1：50,000）

13. その他

【嶋戸倉台場】富津市金谷字九真／上総国天羽郡金谷村

第130図　嶋戸倉台場の位置

1．藩名　①忍藩：阿部忠国
　　②会津藩：松平容敬―容保
　　③柳川藩：立花鑑寛
　　④二本松藩：丹羽長富
　　⑤前橋藩：松平直克

2．期間　①天保14（1843）年～弘化４（1847）年
　　②弘化４（1847）年～嘉永６（1853）年
　　③嘉永６（1853）年～安政５（1858）年
　　④安政５（1858）年～慶応３（1867）年
　　⑤慶応３（1867）年～慶応４（1868）年

3．位置　国道127号丑山トンネル西側の岬先端

4．規模　不明

5．歴史　文献①には、金谷村名主が安政元年に北条陣屋へ差し出した文書に拠るとして、忍藩時代に五百目筒１・五百目短筒１・百目短筒各１挺を据え付け、異国船渡来時のみ竹岡陣屋から弾丸・煙硝を持参したという。安政元年といえば柳川藩時代に相当し、富津陣屋管轄に当たるが、忍藩時代に築かれた可能性を示すものとしてあげておく。以後の軌跡は明らかでないが（資料①では狼烟場として使われている）、一応富津陣屋に準じておく。

5．関連文献

①富津市　1982『富津市史』通史

②会津若松市　2001『会津若松市史』史料編Ⅲ

6．関連資料

①「松平容敬手扣　房総御備場御用一件」（「会津藩第八代藩主松平容敬「忠恭様御年譜」」／文献②）

【勝山台場】鋸南町勝山海岸／安房国鋸南町勝山村

「松平容敬手扣　房総御備場御用一件」には、容敬が房総を巡検した折の記述に、「勝山城下同所磯辺台場」とみえる。この磯辺とは現地にそのような地名がないことから、まさしく磯辺を指すと思われるが、具体的な場所は不明である。但し、勝山城下とあることから、現在の勝山港の地に会津時代に台場が存在したことになろう。

【北条陣屋前炮台】館山市北条内／安房国安房郡郡北条村

安政４（1857）年「遊房総記」には、北条陣屋の「門前の正面二三丁海辺に炮墩あり」と見える。当時の担当は岡山藩であり、炮台は現在の北条海岸さざなみ荘付近に設置されたものと思われる。

【沖島・鷹島炮台】館山市館山字沖ノ島・高ノ島／安房国安房郡

「遊房総記」には「館山侯の持場にて、炮墩有り」と見え、島の西側ないし北西に設置されたと思われ

るもののその具体的な位置は不明である。因みに当時の館山藩主稲葉正巳はその後、海陸御備向并御軍制取調・大小炮鋳立等の役職を歴任し、幕末慶応期には陸軍奉行・海軍総裁の要職に就いている。

【石子山炮術場】鴨川市貝渚字石子山／安房国長狭郡貝渚村

嘉永７（1854）年の岩槻藩士「総房江勤番中日記」には「貝渚村石子山江砲術角場出来致申候」とみえる。石子山とは心巌寺裏山の石山に相当する。北条陣屋や木戸陣屋など、海防各陣屋内では銃の練習場（角場）が設けられていたが、前原陣屋ではそれが川を挟んだ石子山に設けられたことになる。

【青木番所】富津市青木字三ノ手ほか／上総国周淮郡青木村

『富津市史』通史に拠れば、弘化２年に飯野藩が青木村出先に見張番所を設けたとある。安政４年「遊房総記」には「青木村出先に保科弾正侯持場一番手・二番手・往還東に三番手の陣場あり」とあって、しばらくは維持されたのだろう（青木村は江戸前期より佐貫藩領）。時あたかも前年の天保15（1848）年には幕府は各藩に対して沿海の警備を命じており、それに応じたものと受けとれる。現地での比定は、一番手：鯨州・二番手：通称との山・三番手：小字三ノ手とされ、現在、小字三ノ手は確認出来るが、との山・鯨州共に市街地のなかにある。なお、二番・三番手共に土塁が巡っていたという。

【狼煙台】内房沿岸要所／（上総国周淮郡～安房国安房郡）

異国船出現時の対処として先ず速やかな伝達手段が必要であり、狼煙や篝火が用いられた。会津藩主松平容敬が房総沿岸の警備を命じられた弘化４（1847）年以降４年余りの「備場御用」に関わる記録（「松平容敬手扣　房総御備場御用一件」）は極めて貴重な資料であるが、とりわけ狼烟台等の所見は他に類を見ない（絵図では「近海見分之図」富津炮台で発射の様子有）。即ち、「異船相見候ハヽ見認候御台場ニおいて狼烟を発し、…其他之御台場々々狼烟見請候ハヽ互ニ照応いたし、御台場之外其間夕ニ見通し宜場所々々ニ而も狼烟を発し両岸一時ニ相弁候様」また「但狼烟場所之義四家申合打試照応之上場相究、且打上ヶ火而已ニ無之昼者大烟を挙ヶ、夜ハ大篝を焚候」とあって、各台場の他に見通しの良い岬などに狼煙台を設け、昼夜に応じて互いに照応出来るように事前に打合わせや試煙を行うことと述べている。この狼煙については「近海見分之図」の富津炮台試狼烟図に打上げの様子が描かれており、煙と共に火柱が上がっている。木筒（木砲・子母砲）に火薬を詰めたものであろうか。更に、「富津竹ヶ岡両所之篝并狼烟照応」はもちろん、「島戸倉橋山下ニ而当所竹ヶ岡南無谷ニ而狼烟照応」・「篝場先ツハ富津ハ御船蔵前御多聞左り下タ、竹ヶ岡ハ十二天崎下タ之御台場左右之内、以上弐ヶ所ツヽと相心得可申候、南無谷崎磯根崎へ相成候ハヽ、是又壱ヶ所ツヽ為焚可申候」とあって、富津陣屋西南―磯根崎―竹岡十二天社台場―島戸倉―南無谷という具体的な伝達ルートを知ることが出来る。もちろんこの他に早船・飛脚も併用されたし、各村々寺院では予め火事と区別するよう決まりをもって鐘が打たれたようである。

第４章　その他

大名・旗本の地方支配は陣屋という装置のみで成り立っているのではない。それはセンターではあるが、その他にその管轄に属する施設があって機能した。ここでは陣屋の理解に資するため、その外縁にある施設について適当な例をあげて解説することとしたい。

第１節　番所

藩領を出入りする人々の取締りや物資の流れを監視するため、その境界となる街道に置かれた番所を口留番所という。上総川越藩領では、小櫃川上流の亀山―香木原を経て鴨川へ至る峠には長野田番所が、また、小糸川上流の三島―奥畑を経て房州に至る峠には黒塚番所が置かれた。前者は峠の切通し道の北側に番所跡があり、標柱も現存する。後者は峠の南側中腹平場に番所が設けられ、稲荷社も現存する。

図版158　長野田番所南側峠切通し道

図版159　黒塚番所跡近景

第２節　会所

会所とは様々な意味合いがあるが、ここでの会所とは特産物の運上や領外への運送に関わる現地扱所を意味する。具体的には、藩領ないし旗本領山林の維持・管理のための役所などは山会所と称した。例えば上総山間部の夷隅郡内では植村氏時代から薪炭の運上が課せられ、会所が設けられていたが、岩槻藩領はさらに広大で（勝浦―大多喜―市原）、会所（現大多喜町会所）を設け（管轄勝浦陣屋）、筒森村の名主永島氏と太田代村名主菅野氏を山守に任命して管理させた。生産された炭は一定の上納を義務付けたが、後には藩営とするなど、積極的な経営を行っている（『大多喜町史』・『市原市史』中巻・『勝浦市史』通史・川名 登「近世上総山村の支配と村落」『商経論集』17号ほか）。この点、山を越えた小櫃川流域や小糸川流域でも、川越藩や 旗本曽根氏による薪炭経営がみられ、運上金が課せられた。領外への移出には多く

川船が用いられたため、大輪田河岸（管轄三本松陣屋／『君津市史』通史）また、北総では牧場の馬除け土手の櫟材を端緒として、製炭が盛んになったとされ、佐倉藩では専売制をしき商人を炭御用達とし船積み先の千葉町には会所（炭会所）がおかれたという（『佐倉市史』巻二）。なお、佐倉牧では年に一度の捕馬があり、幕府や佐倉藩への納入分のほかは牧士組頭嶋田氏の酒々井野馬会所で一般に馬を売払ったが、その屋敷は隣接して会所と馬込が併存するものであった（「嶋田長右衛門御役屋敷絵図」／『酒々井町史』史料集三）。同様嶺岡牧では東西の牧の間に会所（八丁会所）が設けられ、現在もその遺址は明瞭である。

図版160　鴨川市嶺岡牧八丁陣屋跡現況

第３節　郷蔵

年貢米は検見取りと定免、つまりその年々の収穫高を調べて賦課する方法と決まった貢租率で収納するやり方があり、大名や旗本（領主・地頭）によって租率は異なっている。時として襲う天災や猪の害などを考慮しなければ一揆の原因ともなったが、房総の地頭たちは概して年貢減免には柔軟に対処したようである。石代納（金納）は別として、収穫された米は検査され俵詰めされた後、一旦陣屋内の蔵か村々の蔵（郷蔵）へ収納された。この米蔵については従来研究対象にもなっていないものの、ある意味領主経済の基幹に関わる施設といえる。蔵の存在は村々の明細帳などで知ることが出来るが、福島藩東金領の場合、蔵は５か所（上宿・新宿・田間・二又・養安寺）にあり、規模は梁間２間～３間、桁行４間～６間であった（『福島市史資料叢書』第17輯）。なお、江戸屋敷へ送るまで（11月～12月）は番人（蔵番）が付けられた。田間御蔵については、古写真があり、軒瓦には板倉家九曜文があったという（前掲文献）。

第５章　発掘された陣屋

はじめに

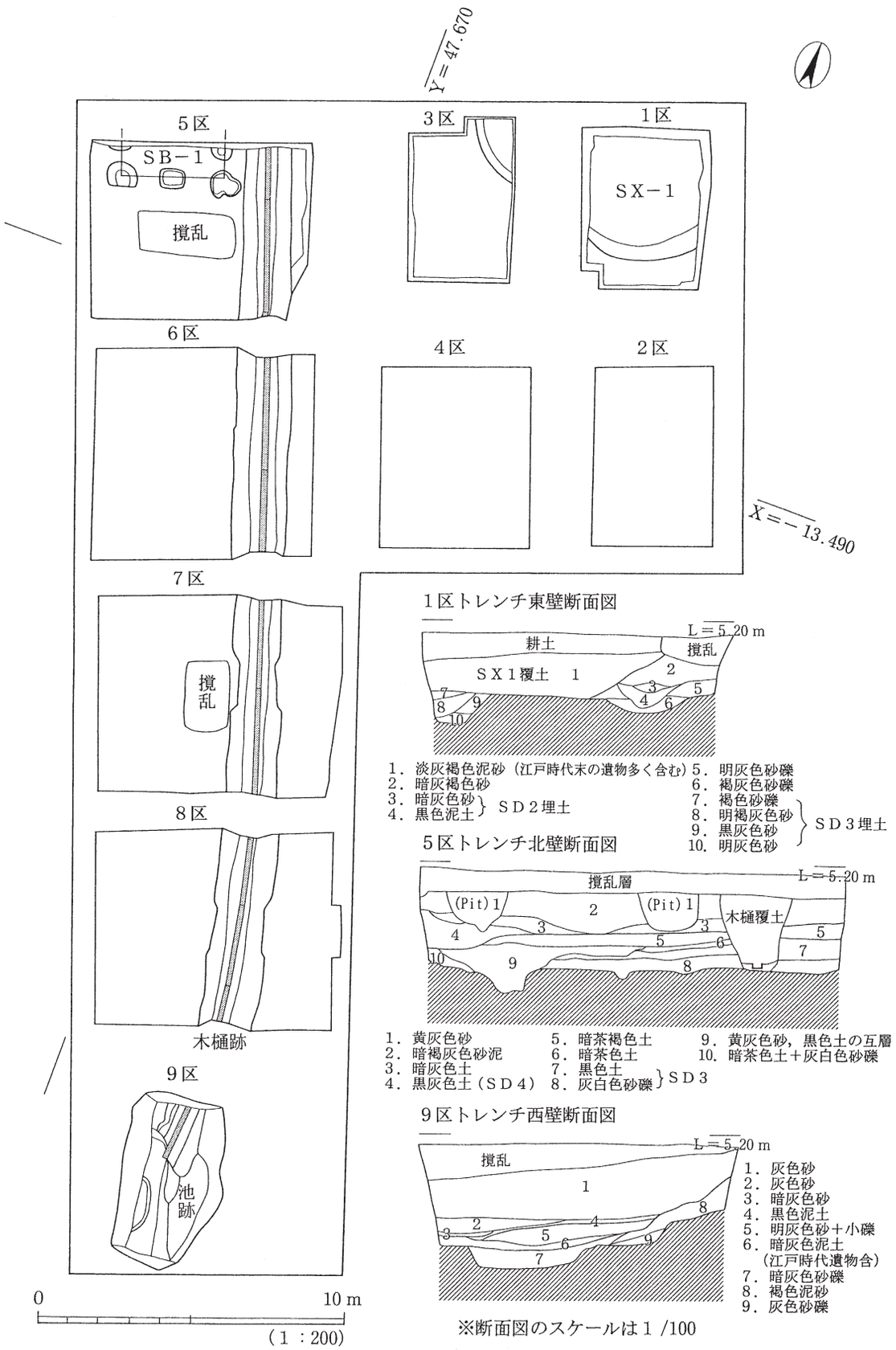
千葉県内で発掘調査された陣屋は、匝瑳市堀川陣屋、成田市高岡陣屋、酒々井町大堀陣屋・墨古沢遺跡、印西市岩戸陣屋、千葉市生実陣屋・亥鼻陣屋、流山市加陣屋、木更津市真武根陣屋、富津市飯野陣屋・富津陣屋、鴨川市東条陣屋、南房総市長尾陣屋などである。これらの調査概要は第２章の各陣屋の項で記したが、本章では、比較的まとまった遺構・遺物が検出された貴重な事例として、高岡陣屋、真武根陣屋、飯野陣屋、東条陣屋、長尾陣屋（以上大名陣屋）、富津陣屋（海防陣屋）の調査成果を紹介する。なお、遺構・遺物の挿図共、各発掘調査報告書等から抜粋して転載したもので、遺物の図中の（　）付番号は報告書掲載番号である。

第１節　高岡陣屋（成田市）

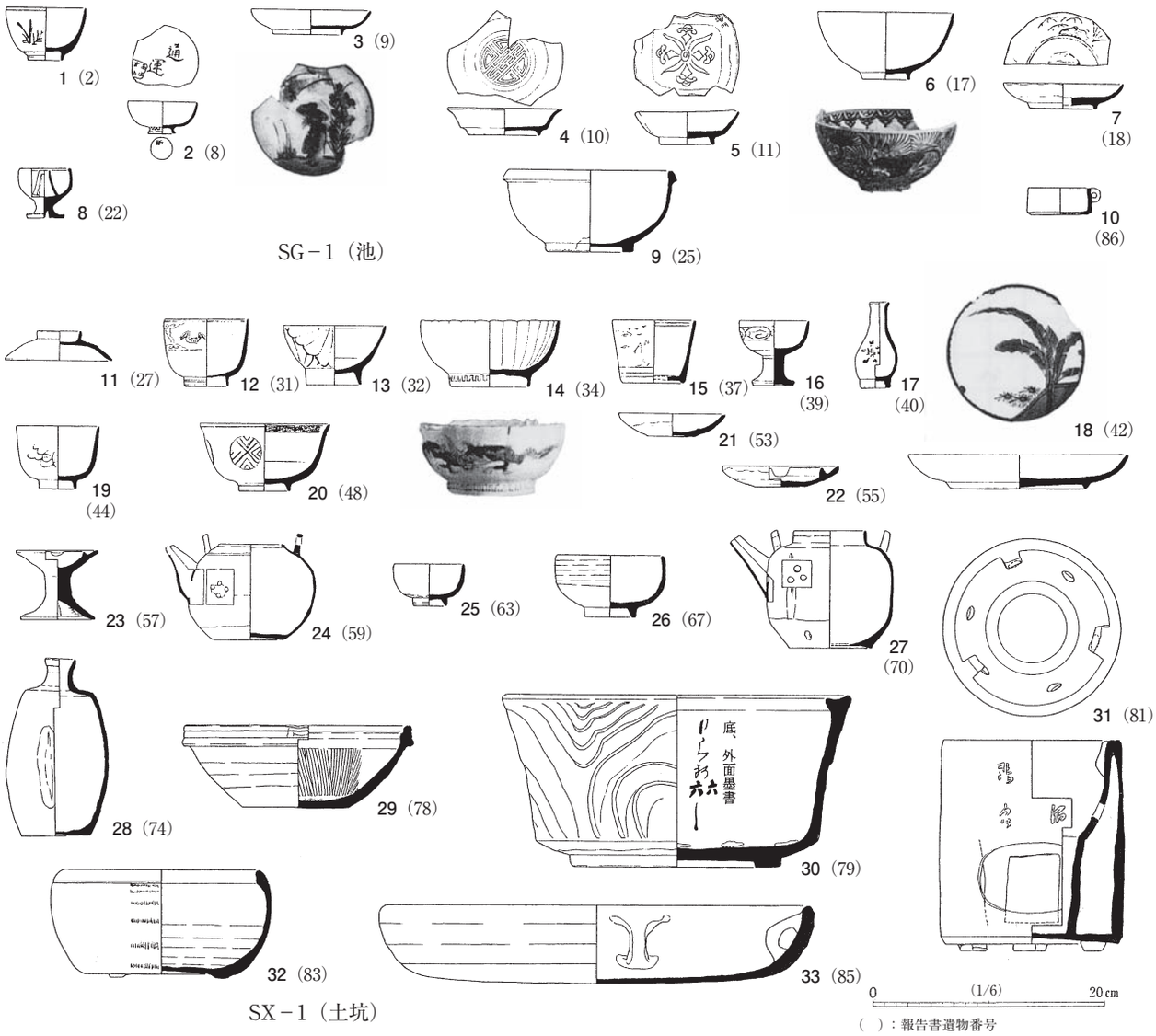
１．調査歴と検出遺構（第131・132図）

発掘調査は、農協倉庫建設に伴い平成10（1998）年に300㎡程の面積が実施された（文献①）。陣屋関連遺構は、陣屋図（図24）に掲載される泉池の北端部にあたるとみられる池跡（SG－1）、池跡から北に伸びる暗渠木樋約34m、掘立柱建物跡１棟、擂鉢状土坑（SX－1）である。池跡では、表土下0.2m～0.5mの現代攪乱層、0.6m～1.0mの陣屋廃絶後の埋土とみられる灰色砂層、その下0.8m程が池の覆土層で、最下層の泥土層から陶磁器類が多く出土した。木樋は４枚の松板を箱形に組み合わせた「寄せ木式」で、池

第131図　高岡陣屋跡発掘地点と周辺地形図（文献①）



第132図　高岡陣屋跡調査区（江戸時代遺構）（文献①）



第133図　高岡陣屋跡出土遺物（文献①）

から排水する水位調節機能とみられる。土坑SX－1の推定規模は径８ｍ以上・深さ１ｍ前後で、多量の遺物が含まれていた。掘立柱建物跡は陣屋図にはなく、遺物も出土しておらず時期等不明である。他に古墳時代・平安時代・中世の溝、古墳時代の河川跡が遺物と共に検出された。

２．出土遺物（第133図）

１～９・10は池跡（SG－1）出土である。１～５は瀬戸・美濃磁器（１染付小碗、２染付小杯、３・５染付皿、４白磁型打皿）、８・９は瀬戸・美濃陶器（８鉄釉ひょうそく、９灰釉鉢）、６・７は肥前磁器（６染付碗、７染付皿）、10は関東在地系陶器（緑色釉鳥餌箱）である。時期は、19世紀前半以降が２・７～９、19世紀後半が２～５である。

11～33は土坑（SX－1）出土である。11～18は肥前染付磁器（11碗蓋、12小碗、13碗、14鉢、15そば猪口、16仏飯具、17仏華瓶、18皿）、19・20・24は瀬戸・美濃染付磁器（19小碗、20碗、24急須）、21・22・25・26・28・30が瀬戸・美濃陶器（21鉄釉灯明皿、22鉄釉油受皿、25灰釉小碗、26透明釉・鉄釉掛分碗、

28ぺこかん徳利、30黄緑色釉手水鉢)、23・27は関東在地系陶器（23透明釉台付油受皿、27銅緑色釉土瓶)、29は堺産擂鉢、31は白瓷系土器（涼炉)、32・33は瓦質土器（32火鉢、33焙烙）である。時期は18世紀代が25、18世紀後半が26、19世紀前半以降が11～23・27～30、19世紀後半が24である。

その他の遺物には、池跡から多く出土した瓦（軒丸瓦：巴文・連珠、軒桟瓦：巴文・唐草文）のほか、キセル、硯、土人形、泥面子、銭貨等がある。

３．小結

池跡（SG－1）出土遺物は比較的長期間である18世紀後半～19世紀後半、土坑（SX－1）出土遺物は19世紀前半～後半が主体である。いずれも生活感があり、池跡の遺物は永年の間に廃棄されて溜まったもの、土坑の遺物は陣屋廃絶後に一括投棄されたことが推測されている。

文献

①黒沢哲郎　1998『高岡陣屋跡』下総町教育委員会（(財）香取郡市文化財センター）

第２節　真武根陣屋（木更津市）

１．調査歴と検出遺構（第134・135図）

隣接地の土地区画整理事業に伴う発掘調査に関連して、昭和57（1982）年に一部が測量され、昭和63（1988）年に西側斜面部の測量と全体縄張図が作成された（文献①・②)。発掘調査は、平成８（1996）年に陣屋北側（区画３・４）（文献③)、平成９（1997）年に陣屋西側斜面部及び谷部分で実施され（区画６・９）（文献④)、平成10（1998）年にはそれまでの成果がまとめられた（文献⑤)。また、平成13（2001）年には陣屋南東部（区画２・８）が調査された（文献⑥)。本稿では、調査面積が広く最新である平成13年の調査成果を中心に紹介する。

（１）構造

当時の絵図等は存在しない。北部は明治時代に土塁をある程度残して茶畑になり、戦後の畑開墾時に本格的に土塁が削平されたこと、さらに中心部は礎石・瓦を取り除かれ、平成になって植木畑により壊滅的攪乱を受けたこと等が聞き取りされた。また、南側の東西方向の現道は堀割道として利用されたことが推測されており、その南側の台地は道路の高さまで削平されて宅地化され、陣屋外郭南辺の西半分が削平されている。また、陣屋南側の堀割道を西に下った地区が「枡形」と呼ばれ、土塁が３方に巡り門番が常駐していた聞き取りから、本体以外も含めると陣屋範囲は倍近くなる。こうした聞き取りの他、明治期の迅速図・航空写真・測量図・地割り・発掘調査等から構造が復元推測されており、宅地化された東西道路以南を除いて、土塁・溝・段差で区画された範囲に番号が付けられた（第83図)。遺存状況が良好な地区は、中心部の区画１南部以南で東西道路までの範囲のみである。区画１は、東西約60m・南北約80mの長方形であるが、約60m四方の方形区画の南側に約20m×約60mの区画が付属する形である。この付属区画の南辺には土塁を屈曲させた内枡形虎口、南東隅には出枡形虎口が開口し、南北道路の南端にも内枡形虎口が残る。南北道路の南西部（区画７・９）や南東部（区画８）内には土塁や段差で小区画が多く配置されており、区画１も含めた残存部では７箇所の虎口が確認されている。また、区画２・８は陣屋内部からのみ出入り可能な区画であることが推測されている。区画１の正方形区画が大工棟梁家文書の『真武根陣屋造営工費受領之証写』の「御殿の間」に該当する空間であろう。なお、北部の区部３・４は戦後の開墾時に

古墳墳丘が地膨れ状に存在した証言から、整地が不完全で未完成であったことも推測されている（文献⑤）。

（２）地表面で確認された遺構等

土塁・溝の他、石祠１基（区画８）・井戸２箇所（区画７・８）・瓦溜２箇所（区画２・７）。なお、石祠の「祭古霊」銘には、陣屋構築以前の寛政４（1793）年に長楽寺僧が中心に近辺を開墾した際に古墳から出土したものを納めたとある。

（３）発掘調査遺構

（北部　区画３・４）

瓦廃棄土坑１基（陣屋廃棄後に桶等埋設穴に瓦等を投棄したものと推測）・溝6条（宝永火山灰堆積）。

（南西部　区画６・９）

瓦囲炉１基（鉄釘・文久永宝・砥石出土）・段切整形５箇所・土塁１条（高さ0.5m～１m、瓦・陶磁器・ワインボトル出土）・溝４条（瓦・陶磁器出土。宝永火山灰堆積２条）・空堀１条（上幅20m・下幅６m・深さ３m）。

（南東部　区画２・８）（第134・135図）

トレンチによる確認調査であるが、伐木散乱や重機による土塁・瓦溜等の破壊があり、限定された調査である。礎石５箇所（明瞭な建物跡１棟・礎石４箇所）・瓦敷遺構１箇所・瓦溜８箇所・土坑２基・溝５条・井戸１基・祠１基・土塁（１m前後）10条・地山整形面５箇所・焼土範囲５箇所。

２．出土遺物（第136図）

掲載した遺物は、平成13年調査時の区画２・８から出土したものである。１～４は染付磁器（１瀬戸・美濃端反碗、２肥前碗、３肥前碗蓋、４瀬戸・美濃角皿）、５・６・８・９は陶器（５瀬戸・美濃鉄釉土鍋、６相馬系青土瓶、８瀬戸・美濃灰釉片口鉢、９信楽系灰釉灯明皿）、７は焙烙、10・11は軒桟瓦である。他に瀬戸・美濃磁器小杯、銭貨、鉄釘等が出土した。

区画２－②では、礎石建物跡１棟と灯明皿・香炉等の室内調度品が出土したことから居住施設が、区画８－⑧では、井戸の近辺から焙烙や土鍋等の調理用具が出土したことから台所などの炊事関係施設の存在が推測されている。

３．小結

土塁の高さは１m前後と低く、空堀を巡らすわけでもないが、枡形虎口を多用する城郭式の陣屋は、幕末の外国船来航や倒幕運動などの政治的緊迫状況がもたらした可能性が指摘されている（文献⑤）。一方で、宝永火山灰（1707年）が堆積する溝には土塁や区画溝と平行するものもあることから、陣屋は既存の地割りを活かした縄張を構築した可能性が指摘されており（文献⑤）、中世或いは江戸前期の屋敷・館の改造の可能性も考えられるが、報告書掲載の発掘調査出土遺物には該当する時期のものが見られない点、限定された調査による資料不足ではあるが、再検討が必要であろう。

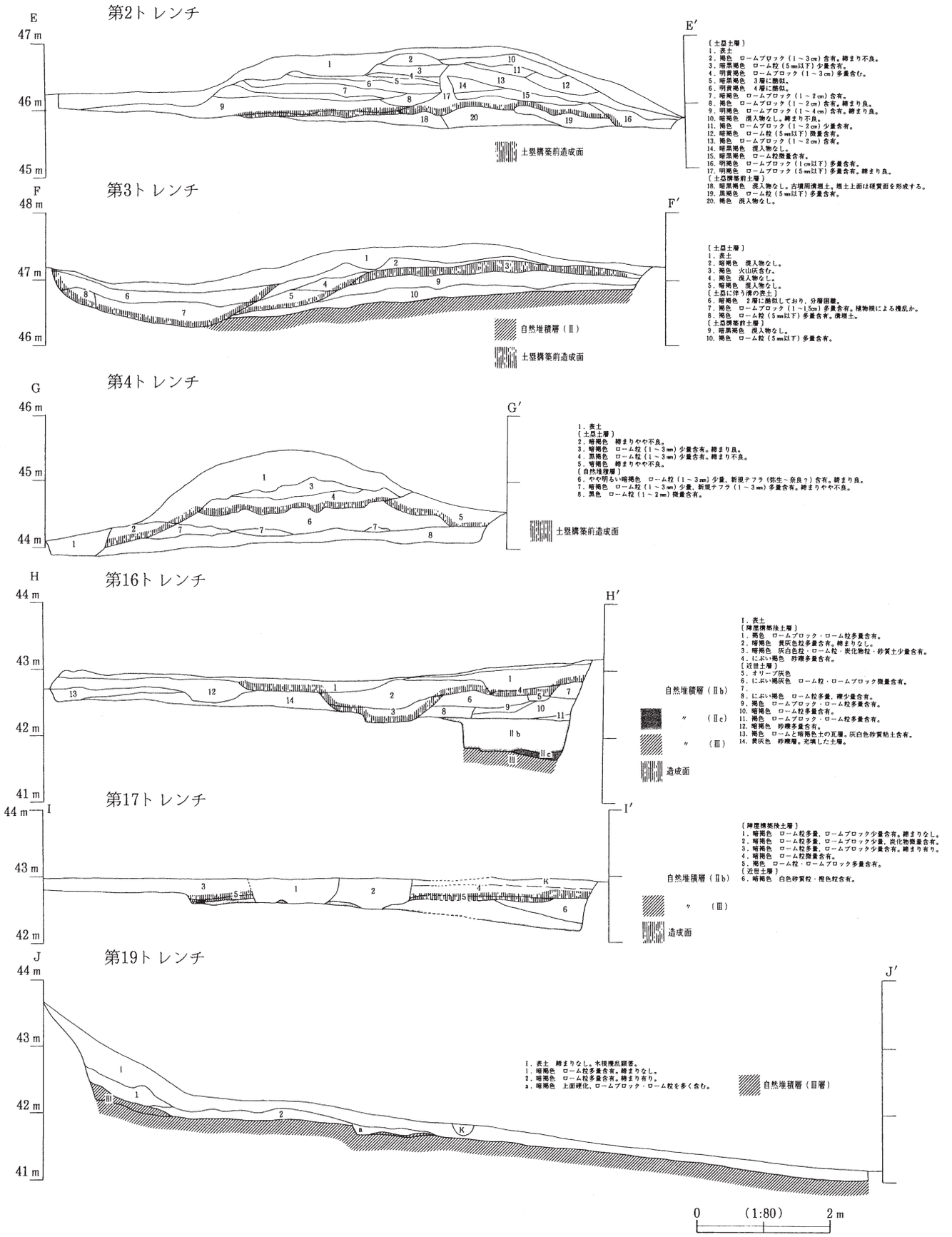
文献

①浜崎雅仁　1990『千束台遺跡群確認調査報告書』木更津市教育委員会

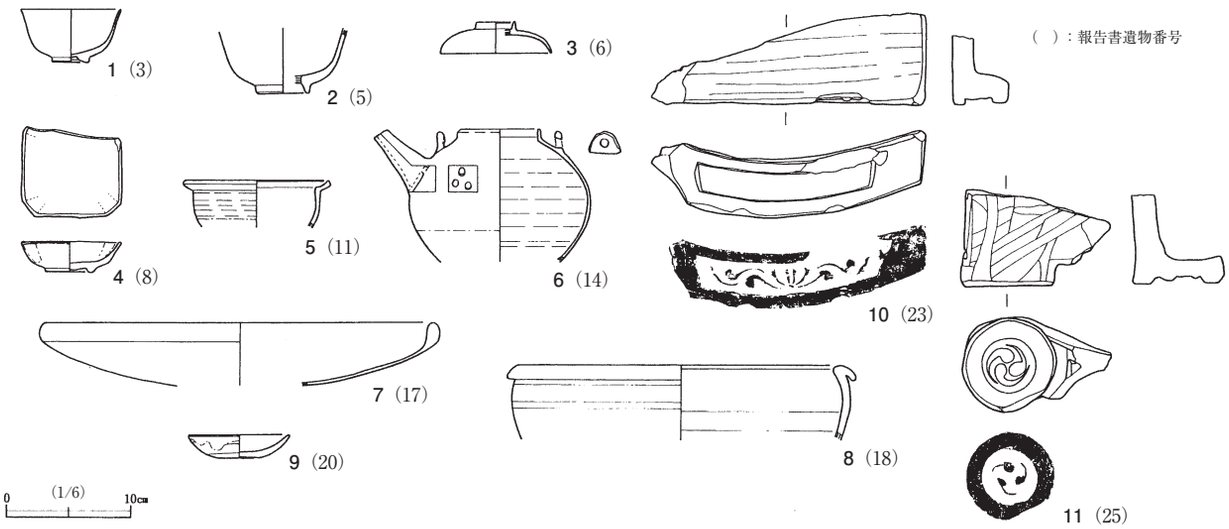
②浜崎雅仁　1991「真武根陣屋」『年報８』（財）君津郡市文化財センター

③矢野淳一　1998「塚原遺跡」『年報15』（財）君津郡市文化財センター

第134図　真武根陣屋跡南東部調査区全体図（文献⑥）



第135図　真武根陣屋跡南東部トレンチ断面図（文献⑥）



第136図　真武根陣屋跡出土遺物（文献⑥）

④矢野淳一　1999「真武根陣屋跡」『年報16』（財）君津郡市文化財センター
⑤稲葉昭智・矢野淳一　1998「幕末陣屋遺構の一例－木更津市請西真武根陣屋について－」『(財）君津郡市文化財センター研究紀要Ⅷ』
⑥斎藤礼司郎　2001「真武根陣屋跡」『平成12年度木更津市内発掘調査報告書』木更津市教育委員会

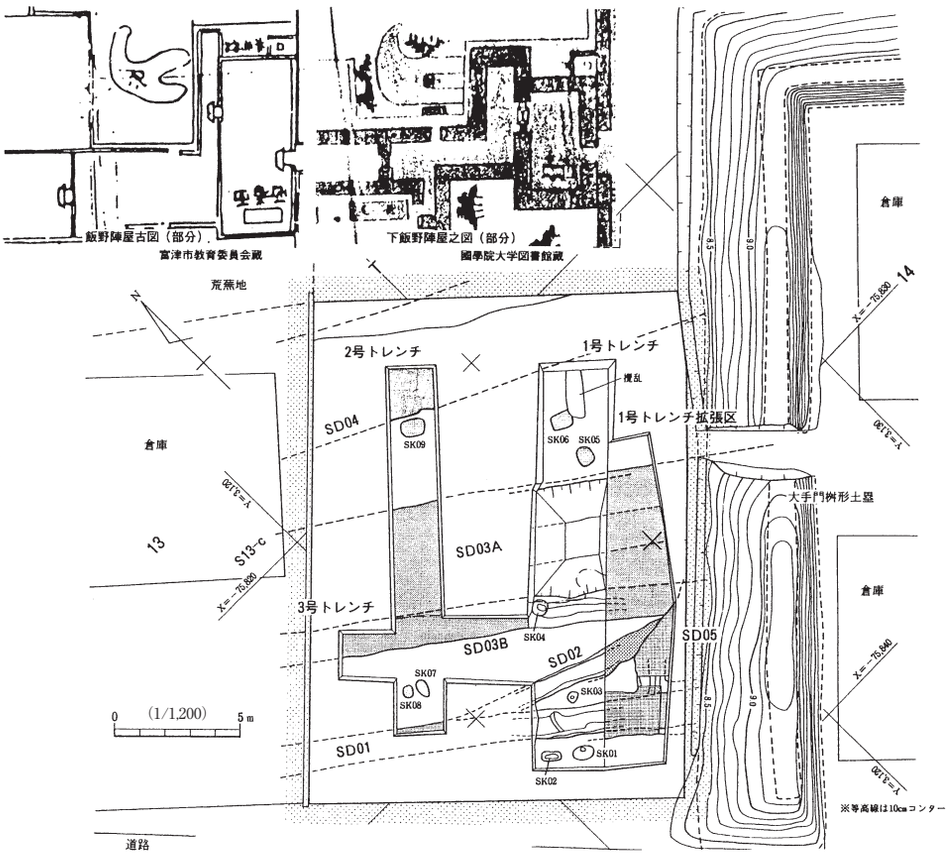
第３節　飯野陣屋（富津市）

１．調査歴と検出遺構（第90図）

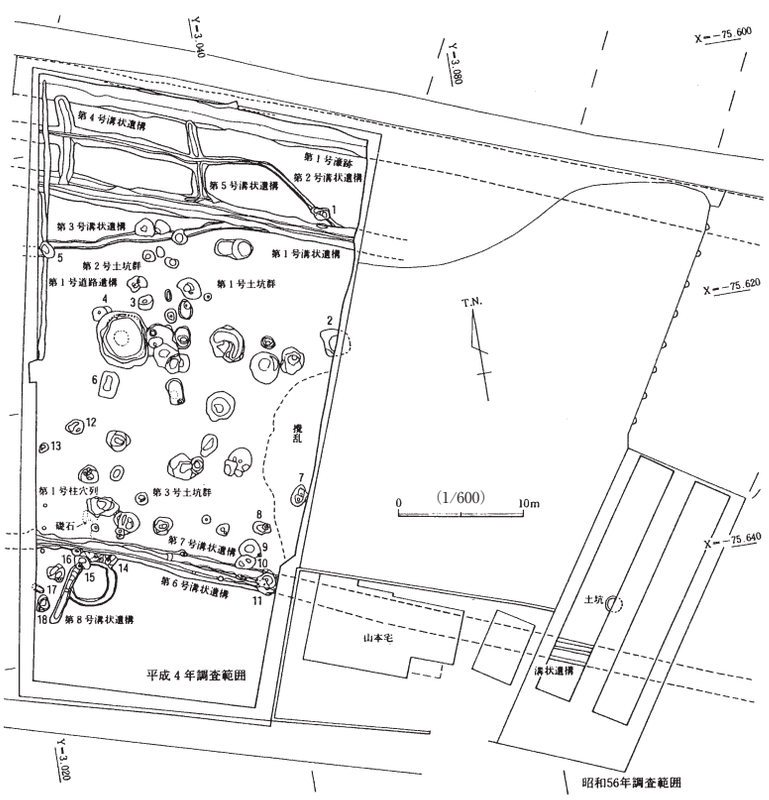
考古学的調査は、昭和56（1981）年の稲荷口遺跡（二の丸）が最初（文献①）で、以降は殆ど宅地等小規模開発に伴う富津市教育委員会の調査を（財）君津郡市文化財センターが実施している。なお、周囲の内裏塚古墳群に関する発掘調査でも当陣屋関連遺構・遺物が検出されているが、陣屋内の主な調査歴は次のとおりである。昭和59（1984）年には外濠の復旧及び環境整備計画に伴う濠の発掘及びボーリング調査（文献②）、昭和62（1987）年には千葉県教育委員会による本丸・三の丸の確認調査（貝殻地業検出：文献③）、平成２（1989）年には三条塚古墳周溝・石室確認調査（飯野藩校礎石検出：文献④）、平成４（1992）年には二の丸（濠跡・建物跡他：文献⑤）、平成５（1993）年（文献⑥）・平成７（1995）年（文献⑦）・平成７（1996）年（文献⑧）・平成８（1997）年（文献⑨）は三の丸、平成10（1998）年には本丸の調査（濠跡他：文献⑩）が実施されてきた。本節では主に、調査面積が広く遺構・遺物がある程度検出された本丸（平成10年）及び二の丸（平成４年）の調査を中心に紹介する。

本丸（平成10年）（第137図）

濠（水堀）跡２条・溝４条・土坑９基が検出された。濠の一つSD03は幅5.5m～６m・深さ1.5m前後・断面逆台形で、覆土下層で加工木材・松の枝・近世瓦等が出土し、埋没初期には松林が周囲に存在し、陣屋建物の建築（修復）が行われていたことが推測され、古絵図（國學院大學図書館所蔵）に描かれる「池」が18世紀以前に構築された濠が廃棄された痕跡であること、濠跡や溝の南東側延長部分は大手門枡形土塁の下層に埋没していることが明らかとなった。



第137図　飯野陣屋本丸跡調査区全体図・絵図（文献⑩）



第138図　飯野陣屋二の丸跡調査区全体図（文献⑤）

二の丸（平成４年）（第138図）

濠跡１条・溝状遺構９条（屋敷地区画溝４条・排水路２条ほか）・道路遺構１条・礎石１基・柱穴列１条・竪穴状遺構（井戸か）１基・土坑群３箇所・その他土坑18基が検出された。濠は二の丸と３の丸を画する濠で、幅推定３ｍ・底面幅0.6ｍ～1.2ｍ・深さ0.7ｍ～0.9ｍで、覆土下層から2,000点を超える瓦・陶磁器類・土人形・ガラス製品等が出土した。土坑群の殆どは柱穴とみられるが、狭い調査区内では建物としての並びは不明であった。

２．出土遺物（第139・140図）

ここで紹介するのは、まとまって多量に出土した二の丸跡の調査から抜粋したものである。１～49は第１号濠跡出土である。１～17、19～25、27・28、31・32は磁器（１肥前染付碗で６の蓋とセット、２・３肥前赤絵碗、４瀬戸・美濃染付碗、５瀬戸・美濃印判染付碗で７の蓋とセット、８・９肥前染付波皿、10清朝白磁陰刻皿、11肥前染付大皿、12肥前染付鉢、13肥前染付湯飲碗、14瀬戸・美濃染付湯飲碗、15白磁小杯、16瀬戸・美濃染付小杯、17瀬戸・美濃型紙摺小杯、19瀬戸・美濃銅版刷酒杯、20瀬戸・美濃染付建水、22染付合子蓋、23瀬戸・美濃建水蓋、24肥前染付花器、25肥前型打紅皿、27・28染付急須、31瀬戸・美濃染付香油壺、32肥前染付蓮華）、18・21・26・29・30・33～40は陶器（18オランダ製染付碗、21鳥餌入れ、26益子染付土瓶、29地方窯染付碗、30益子系土瓶蓋、33擂鉢、34瀬戸・美濃鉄釉甕、35瀬戸・美濃灰釉徳利、36油徳利、37灯明平皿、38鉄釉灯明受皿、39信楽有脚受皿）、40～42は土器（40ひょうそく、41焙烙、42火鉢）、43・44はガラス（43ワインボトル、44オランダ製ジンボトル）、45～47は今戸焼土製玩具（45虚無僧、46藁葺屋根、47鳩笛）、48・49は軒桟瓦である。

50～52は1号溝状遺構出土遺物である。50は鍋島藩窯磁器碗、51は肥前青磁鉢、52はオランダ製染付陶器碗である。

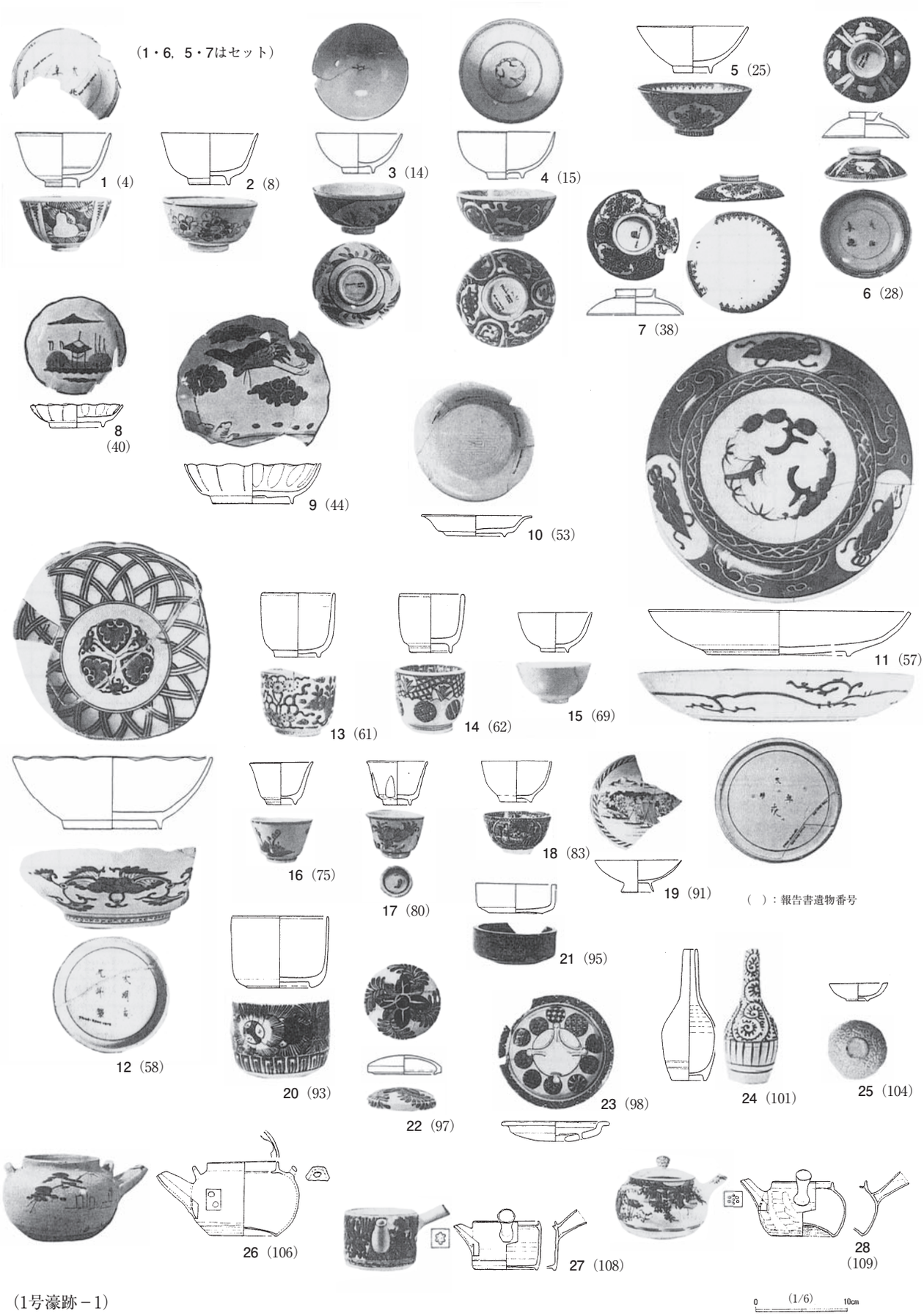
年代的には、18世紀代のものもあるが、19世紀前半から明治中頃までのものが多く、やや高級品が多い傾向がある。明治20年～30年代に旧藩士の転居、家屋の破棄・解体に伴い、濠や土坑に廃棄された建築材や家財道具と推定される。

３．小結

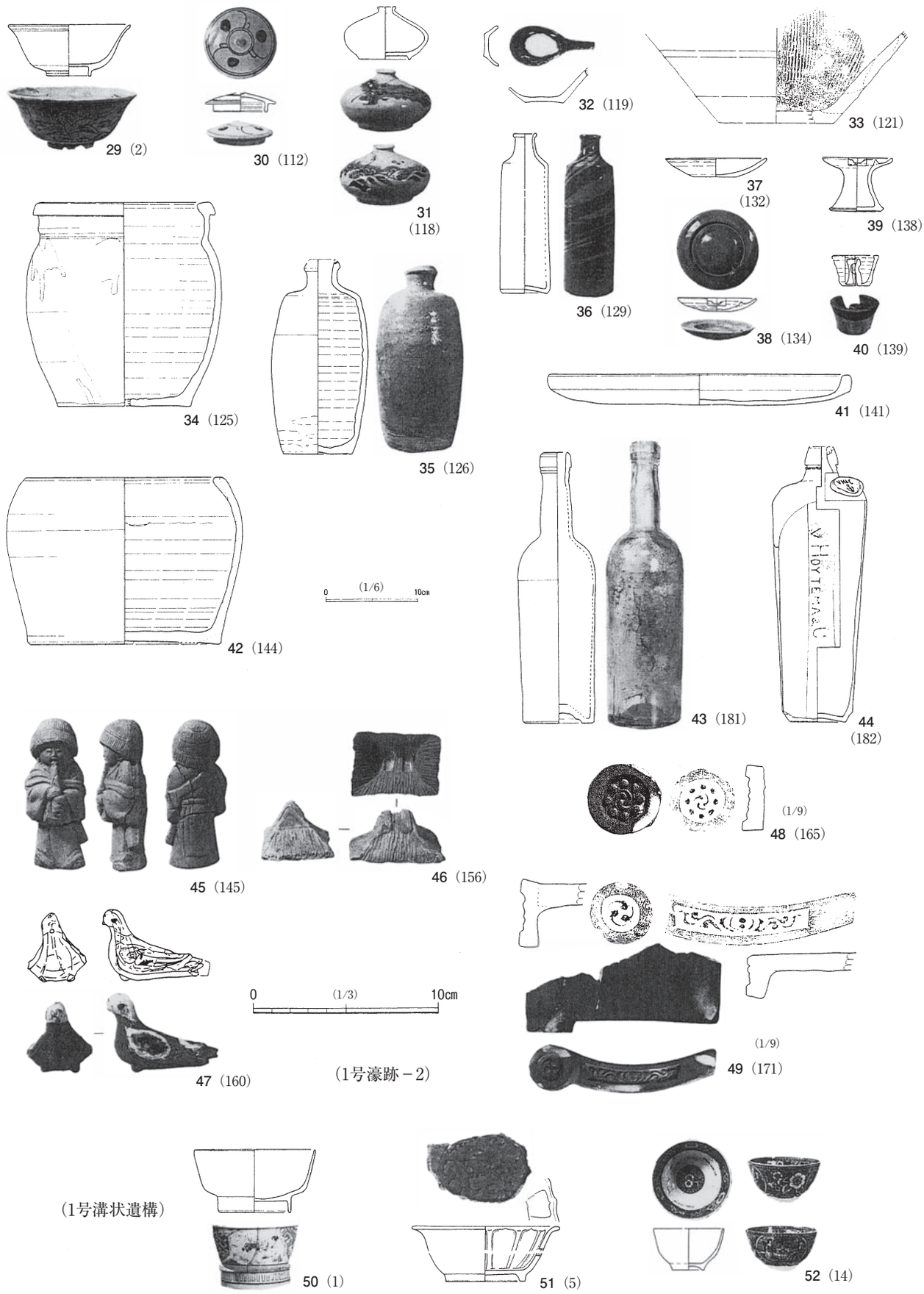
本丸の調査では、18世紀以前の水堀が検出され、それを埋めた後に大手門枡形土塁を構築していることが明らかとなった。二の丸の調査では、明治４年の廃藩後も多くの藩士が江戸藩邸から移り、陣屋内に居住していた様子が窺われる。古絵図から、調査区域は側用人である黒谷直方（石高90石）の屋敷地であったことが推定されており、周囲には上級家臣が屋敷を構えており、黒谷家の東隣は瀬下義方（大参事）、西隣は大出恒升（物頭）の屋敷である。また、絵図には、二の丸・三の丸を画する水堀も描かれている。

本陣屋が、各曲輪の主軸方向の違いや、飯野藩の石高２万石にしては大規模なこと等から、築造時期の差が推測されている（第２章第２節　飯野陣屋跡文献④・⑯）が、改めて文献資料・絵図・考古資料の突き合わせ等から検討していく必要があろう。

なお、陣屋構築に伴って古墳に対する各曲輪の対応の違いが指摘されている。本丸では古墳を避け、二の丸では稲荷塚古墳を煙硝倉に利用し、三の丸では三条塚古墳の墳丘を改変した物見台、外周溝を利用した藩校が設置されている。



第139図　飯野陣屋二の丸跡出土遺物（1）（文献⑤）



第140図　飯野陣屋二の丸跡出土遺物（２）（文献⑤）

文献

①杉山林継　1982『千葉県富津市　飯野陣屋稲荷口遺跡調査報告』稲荷口遺跡調査会

②小沢 洋 1985『千葉県富津市　飯野陣屋壕跡発掘調査報告書』富津市教育委員会

③鳴田浩司　1987『千葉県中近世城跡研究調査報告書　第８集』千葉県教育委員会

④小沢 洋　1990『千葉県富津市　三条塚古墳』（財）君津郡市文化財センター

⑤諸墨知義　1993『千葉県富津市　飯野陣屋二の丸跡』（財）君津郡市文化財センター

⑥中能　隆　1994「飯野陣屋三の丸跡」『平成５年度富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会

⑦諸墨知義　1996「飯野陣屋三の丸跡」『平成７年度富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会

⑧諸墨知義　1997「飯野陣屋三の丸跡」『平成８年度富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会

⑨諸墨知義ほか　1998「飯野陣屋三の丸跡」『平成９年度富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会

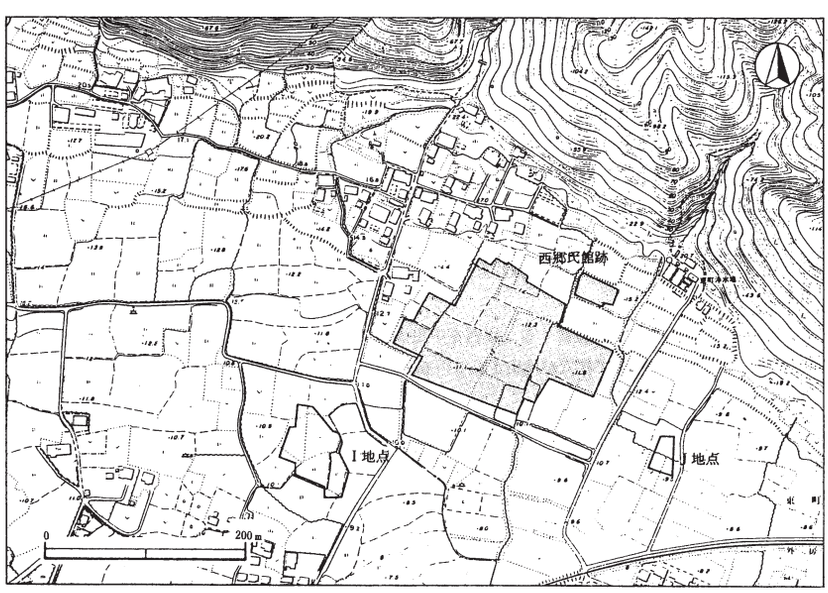
⑩諸墨知義　1999「飯野陣屋本丸跡」『平成10年度富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会

第４節　東条陣屋（鴨川市）

１．調査歴と検出遺構（第141・142図）

圃場整備事業に伴い、平成７（1995）年に遺跡名「西郷氏館跡」として、約27,000㎡が発掘調査された。奈良・平安時代集落（竪穴住居跡７・掘立柱建物跡８・溝３）の他、中世東条御厨地頭東条氏の屋敷跡と近世東条藩西郷氏の陣屋跡の一部と推測される遺構群が検出され、中世は掘立柱建物跡19棟・井戸２基・土坑２基・堀10条、近世は堀11条・井戸２基・土坑１基と推測されている（文献①）。

中世段階には12世紀～13世紀の小溝（Ｍ２・３・10・12）が幅１ｍ～1.5ｍ・深さ0.5ｍ前後で北東部と西部で南北方向に検出され、15世紀半ば以前の大溝（或いは堀）（LM５・10）は幅2.5ｍ～４ｍ・深さ１ｍ～1.8ｍ、小溝（Ｍ８）は大溝内部を区画する様に幅１ｍ～1.5ｍ・深さ0.5ｍ前後で、いずれも屈曲する。近世には、幅４ｍ～６ｍ・深さ１ｍ～2.5ｍの大溝（堀）（LM７・８）が東部から南部に、幅2.5ｍ～４ｍ・深さ0.5ｍ～1.5ｍの中溝（LM１・２・３・４・６）が北部から西部に、いずれも直線状で、屈曲は直角を



第141図　西郷氏館跡（東条陣屋跡）発掘調査地点（文献①）

第142図　西郷氏館跡遺構配置図（文献①）

呈し、溝の切れ目部分は通路として機能したこと、大溝は一辺100m余（一町か）、中溝は一辺50m代（半町か）の区画が形成されていたこと等が推測される。大溝と中溝の主軸がずれることから、時期が異なる可能性が高いが、井戸や無数の柱穴・ピット（掘立柱建物跡）が集中するのは中世堀・溝で囲まれた空間で、近世の堀・溝以外の遺構はLM7近くの井戸２基程度であり、近世段階の建物等の復元はできない。近世の建物の柱穴等は、耕作により削平された可能性があろう。

２．出土遺物（第143・144図）

中世在地領主東条氏の関連で、貿易陶磁を中心に12世紀～15世紀の遺物も多いが、陣屋関連遺物として16世紀末以降の遺物を紹介する。１～23は陶磁器である。１は漳州窯系赤絵碗、２～13は瀬戸・美濃（２天目茶碗〈大窯４〉、３灰釉丸皿〈登窯３～４〉、４灰釉反皿〈登窯４〉、５・６黄瀬戸菊皿〈登窯３～４・４〉、７黄瀬戸鉢〈登窯１～２〉、８鉄釉小壺（登窯１～２）、９・10志野丸皿〈大窯４後・登窯１～２〉、11志野小壺〈登窯１〉、12志野折縁皿〈登窯１～２〉、13織部向付〈登窯１〉)、14・15は唐津系皿、16～23は肥前（16青磁皿、17～19・21染付碗、20染付猪口、22染付皿、23染付香炉）である。

24～33は木製品である。24～26は漆器碗、27は漆器皿、28は漆器盆、29は杓子、30は折敷、31は曲物、32・33は下駄である。

房総中近世考古学研究会では、2008年に愛知学院大学教授藤澤良祐氏を招き、当遺跡の瀬戸・美濃陶器について、基本的には17世紀代までの遺物の時期判定を依頼して集計した（文献②)。その結果、陣屋の機能した時期（1620年～1692年）に相当する連房式登窯１段階～４段階、特に登窯１で前段階の大窯期から突然増加したことが見え（第144図)、陣屋に関連する遺物の可能性が高いことが明らかとなった。

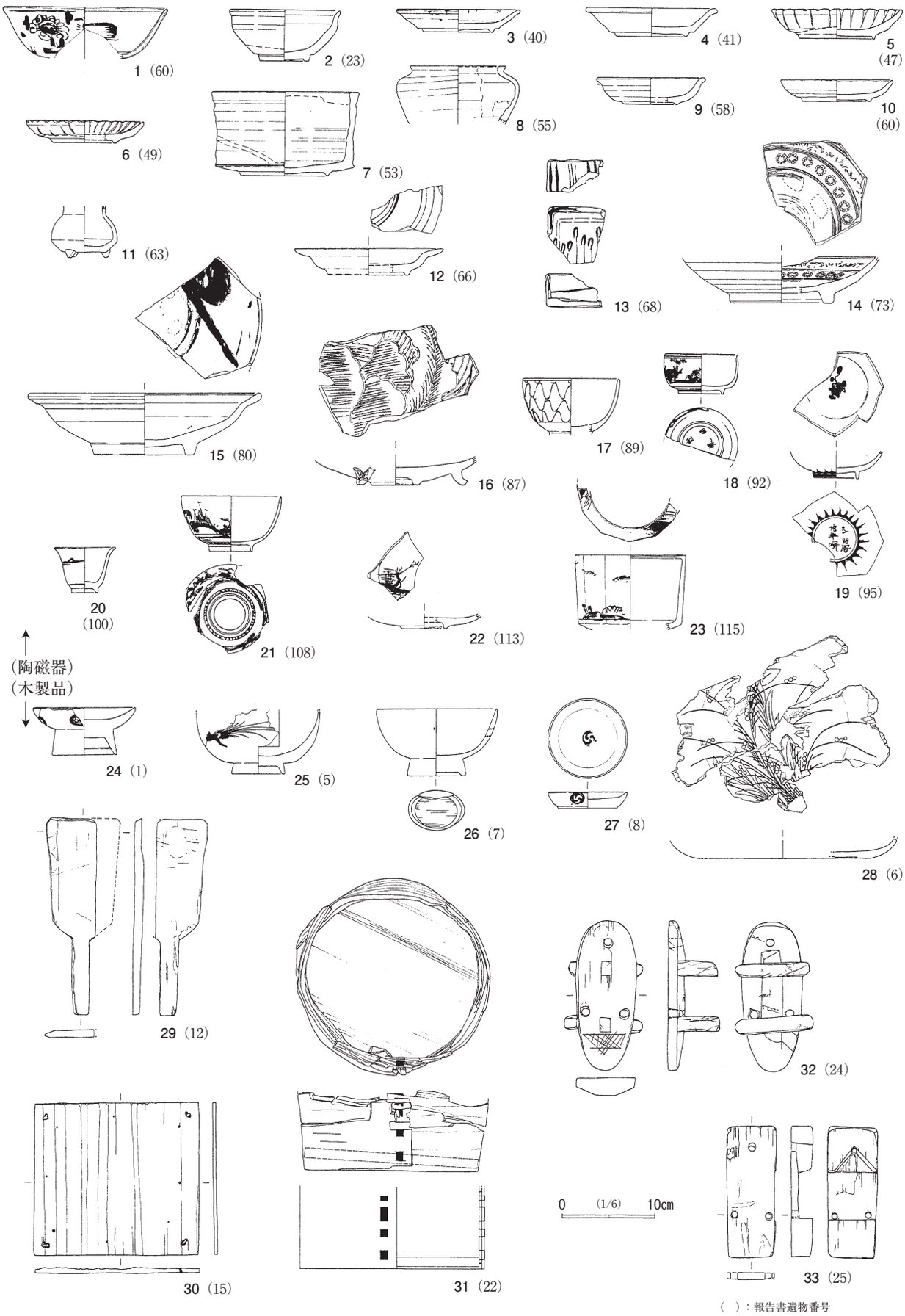
３．小結

堀ともいえる大溝が巡り、覆土から17世紀代の生活感のある遺物群がまとまって出土したことから、当調査区が陣屋に関連する区域で、居住域としての建物も存在したことが推測できるが、溝・大溝・井戸以外の近世遺構が不確実である。或いは耕作により、柱穴等が破壊された可能性も考えられるが、周辺の地割り等も含めて、検討していく必要があろう。

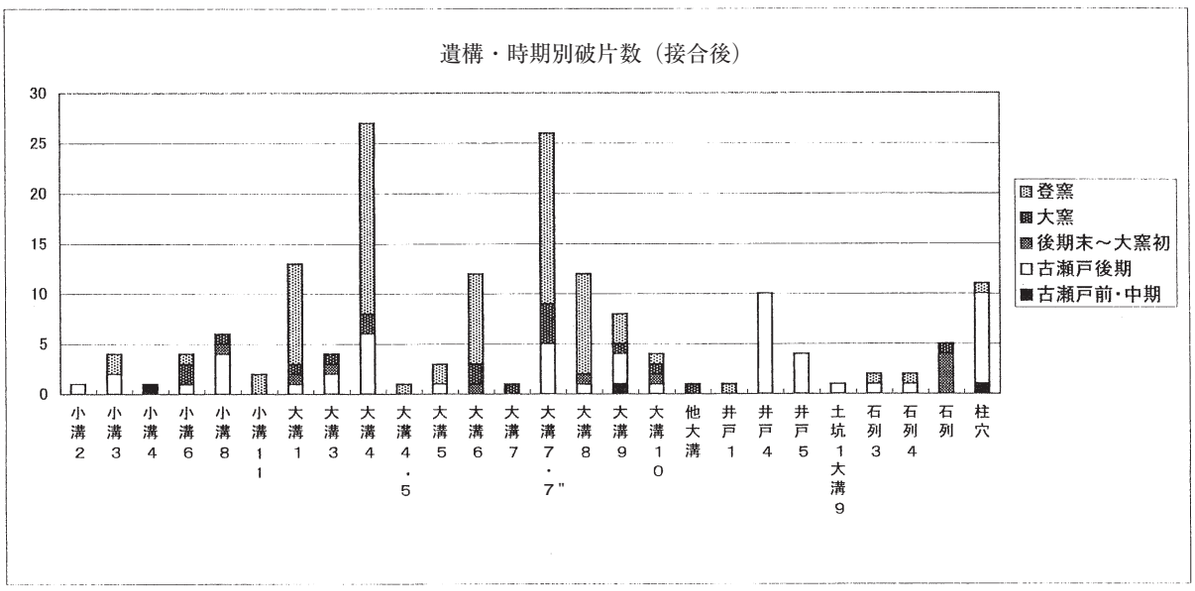
文献

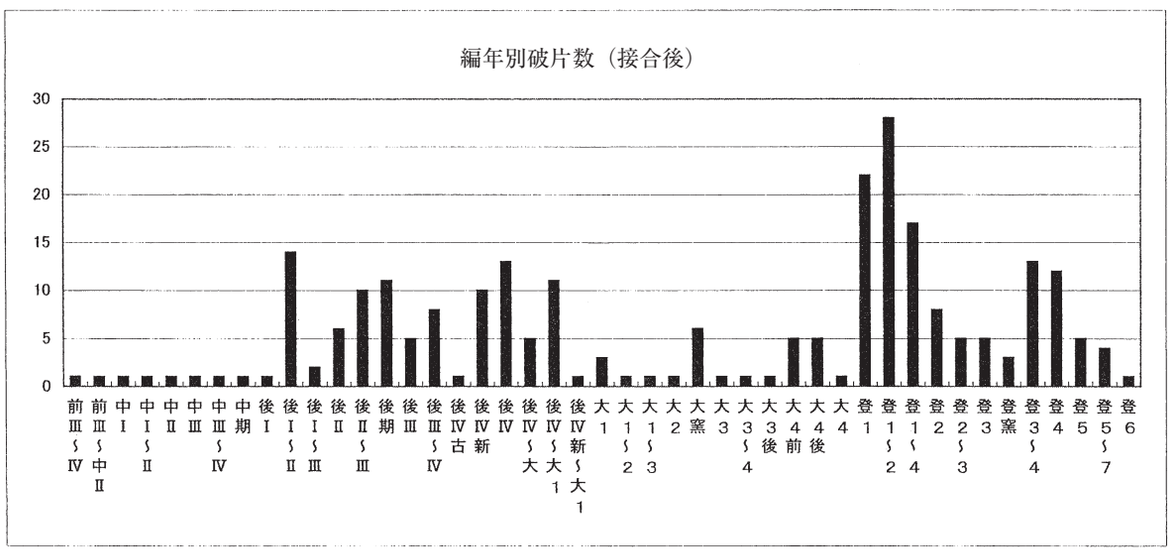
①杉山春信ほか　2000『千葉県鴨川市東条地区遺跡群発掘調査報告書－ほ場整備事業（大区画）東条地区に伴う埋蔵文化財調査－』鴨川市教育委員会

②井上哲朗　2009「鴨川市西郷氏館跡の陶磁器類－中世屋敷から近世陣屋への変化－」『房総中近世考古』 第３号　房総中近世考古学研究会



第143図　西郷氏館跡出土近世遺物（文献①）





第144図　西郷氏館跡瀬戸・美濃組成グラフ（文献②）

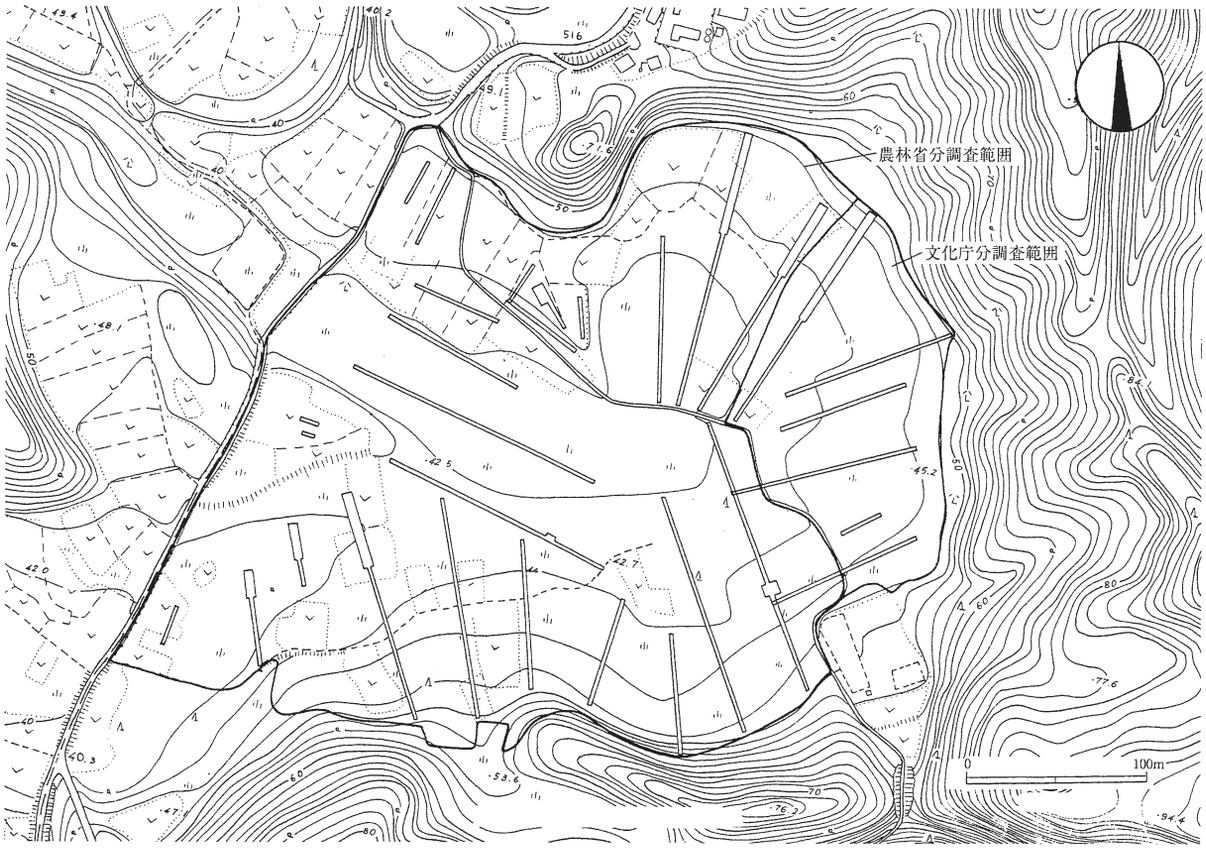
第５節　長尾陣屋（南房総市）

１．調査歴と検出遺構（第145・146図）

圃場整備事業に伴い、平成11（1999）年に当陣屋の約1/3にあたる東部の10,000㎡を対象とした確認調査が実施された（文献①）。トレンチ調査の結果、縄文時代早期遺物包含層の他、陣屋関係とみられる礎石建物跡１棟・井戸跡１基・ピット13基・溝状遺構10条・瓦列７箇所・瓦溜１箇所が検出され、礎石建物跡・ピット群・溝・瓦溜は調査区北西部で検出された。礎石は凝灰岩質泥岩、溝や瓦列は地割の役割とみられるが途中で止まり、井戸は平面円形で木枠が残存していたとのことである。概報のため、北西部以外の検出位置や詳細は不明である。

２．出土遺物

縄文時代遺物の他、陶磁器・瓦・鉄製品がコンテナ８箱分出土した。瓦は遺跡内から大量に出土したとのことなので、北西部の瓦集中地区以外からも出土したとみられる。陶磁器・鉄製品については、概報の



第145図　長尾陣屋跡確認調査トレンチ配置図（文献①）

第146図　長尾陣屋跡遺構配置図（文献①）

ため、近世末から近代との記載のみで、詳細は不明である。

３．小結

「長尾城分見図」（明治３年）（第104図）と照合させると、検出された礎石建物跡・井戸跡とも該当部に記載がなく、陣屋の復元はできなかったとのことである。「分見図」における調査区該当地区には東西道路沿いや北西－南東道路沿いに建物区画が整然と並んでいるが、調査では北西部以外は遺構が殆ど検出されなかった様である。遺構確認面が表土下20㎝のため、耕作による削平も推測されている。ただ、礎石建物跡の位置は「分見図」中の「宇佐美秀一邸」に該当する可能性もあろう。調査区は中央部が窪むため水はけが悪いため、当時はまず排水路（一部は現在も用水路として利用）を巡らすことが重要であったが、湿地状態となれば建物建設も進まず、地割り・整地などは一部にとどまったことが推測されるとし、文献等に記される様に台風被害を受けて工事は中断され、藩士の長尾城下町定住前に移転が行われたことが明確となったとされている。

文献

①畑中博司　2000『千葉県安房郡白浜町　長尾陣屋跡・泉遺跡確認調査概報－中山間地域総合整備事業　南房総白浜地区埋蔵文化財調査業務－』（財）総南文化財センター

第６節　富津陣屋（富津市）

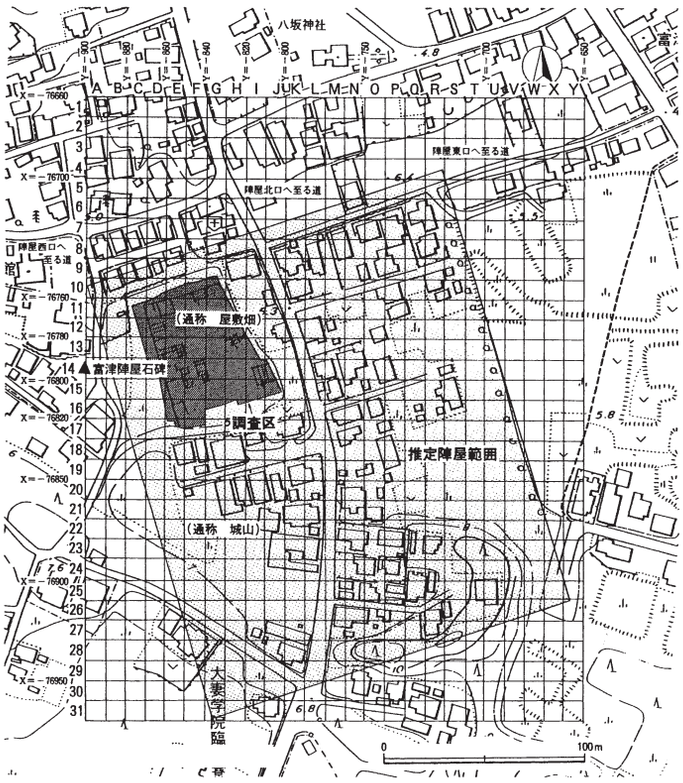
１．調査歴と検出遺構（第147・148図）

宅地造成に伴い、平成８（1996）年度に当陣屋の北西隅部にあたる3,400㎡の発掘調査が実施され、礎石建物跡８棟・ろうそく石列２条・塀跡１条・井戸跡２基・玉砂利敷庭跡１箇所・土塁と塀の間の通路跡・溝11条・土坑29基が検出された（文献①）。建物や塀は、絵図面（会津藩または柳川藩管理時（1847年～1858年）（口絵３、写真114））に記載された配置に一致した。

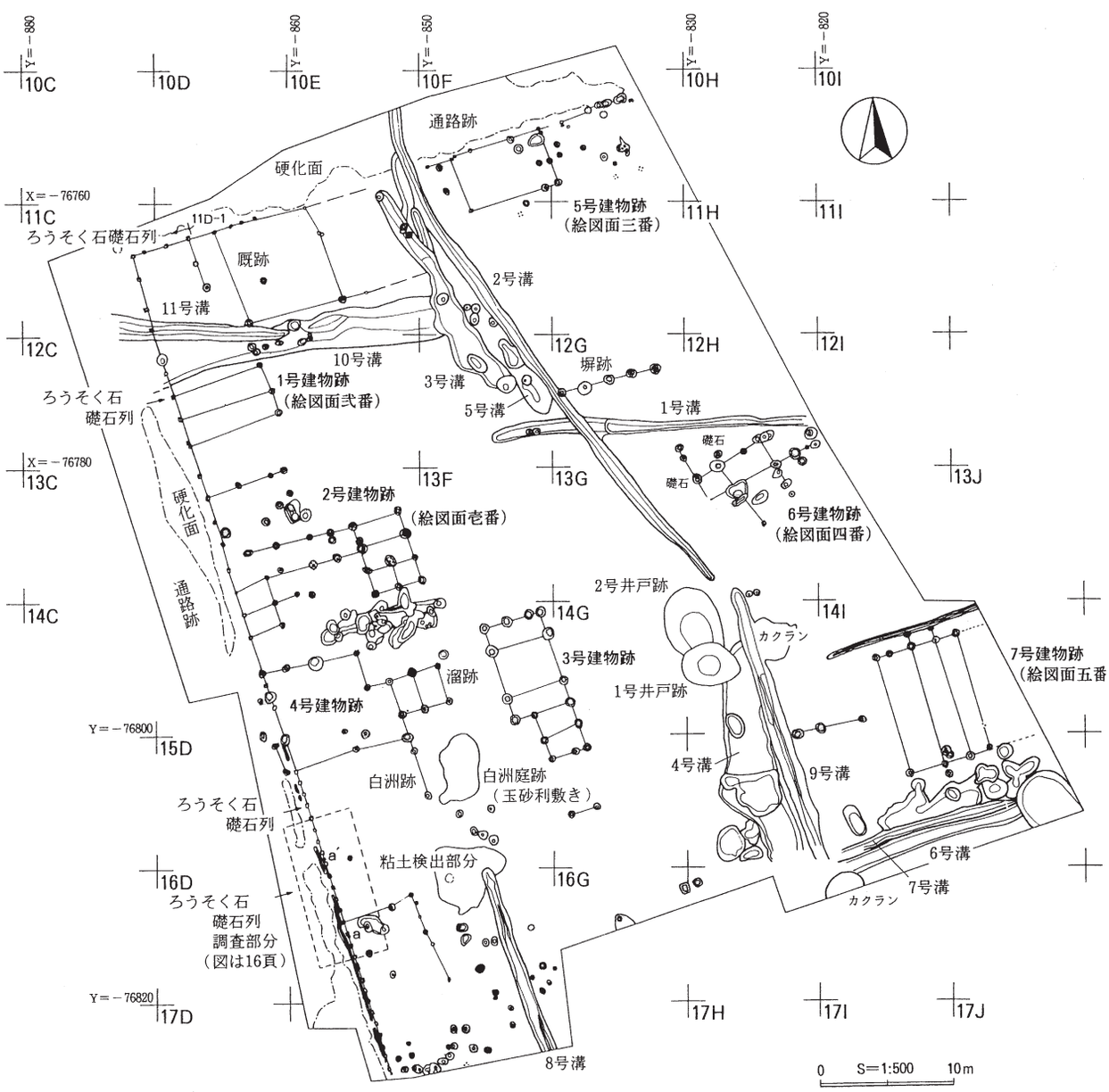
礎石建物跡については、礎石は畑耕作により動いて、現位置をとどめるものは少なかったが、その下に堀り込んだ中に貝や瓦片を充填した地堅め用の「根石」は残存し、調査区北部では貝、南部では瓦が使用される違いがあった。また、絵図面記載の「白州」の部分には玉砂利が敷き詰められていた。ろうそく石列は、調査区北辺の西寄りと西辺全体に検出され、陣屋北西隅の厩や西辺の長屋塀の礎石列と推測される。構造は、列方向に垂直に丸太材を並べて枕木とし、その上に角材板（幅31㎝・高さ15㎝・長さ3.94ｍ）を継手しながらつなげ、さらにその上に平均25㎝角×65㎝に整形された凝灰質砂岩（房州石）を立てたものである。井戸は絵図面とは一致せず、危険防止のため掘削調査はしてないので、陣屋に伴う確証はない。その他の溝や土坑の多くから当調査出土遺物の殆どが出土したことから、陣屋廃棄時を中心に庭や通路に掘られた、生活用具のごみ廃棄穴とそれに付随するものや明治期の軍用鉄道敷設痕跡と推測される。

２．出土遺物（第149・150図）

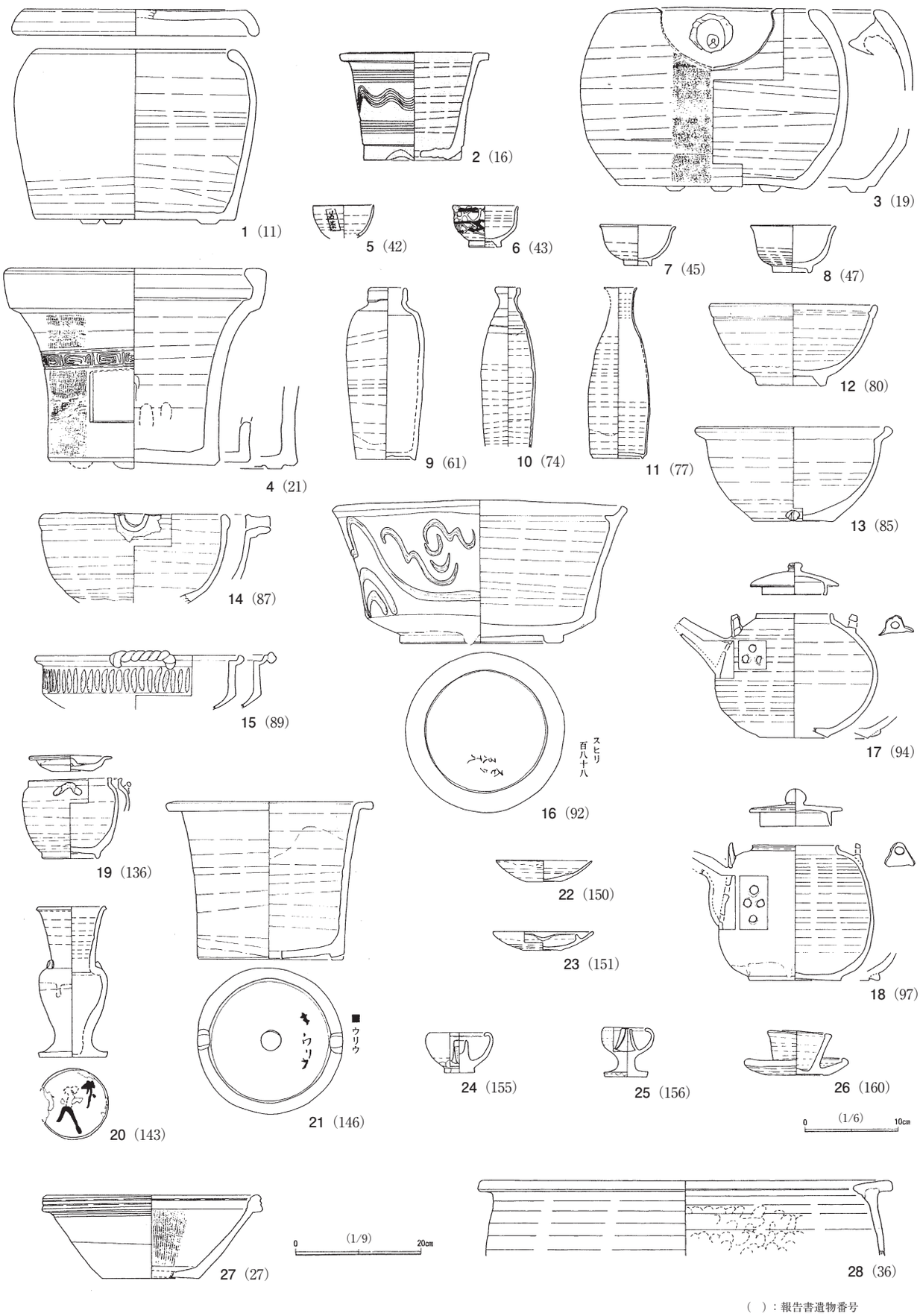
出土遺物は19世紀前半が主体である。１～４・15は土器（１火消壺、２植木鉢、３風炉、４七厘、15江戸近郊灰釉土鍋）である。５～14・16～28は陶器である。５～８は碗類（５「名茶」の文字が入る京・信楽系灰釉小杯、６鉄釉と長石釉の縞模様の萩系碗、７信楽系灰釉端反碗、８外面に梅花文ある京系灰釉端



第147図　富津陣屋跡調査区と周辺地形図（文献①）

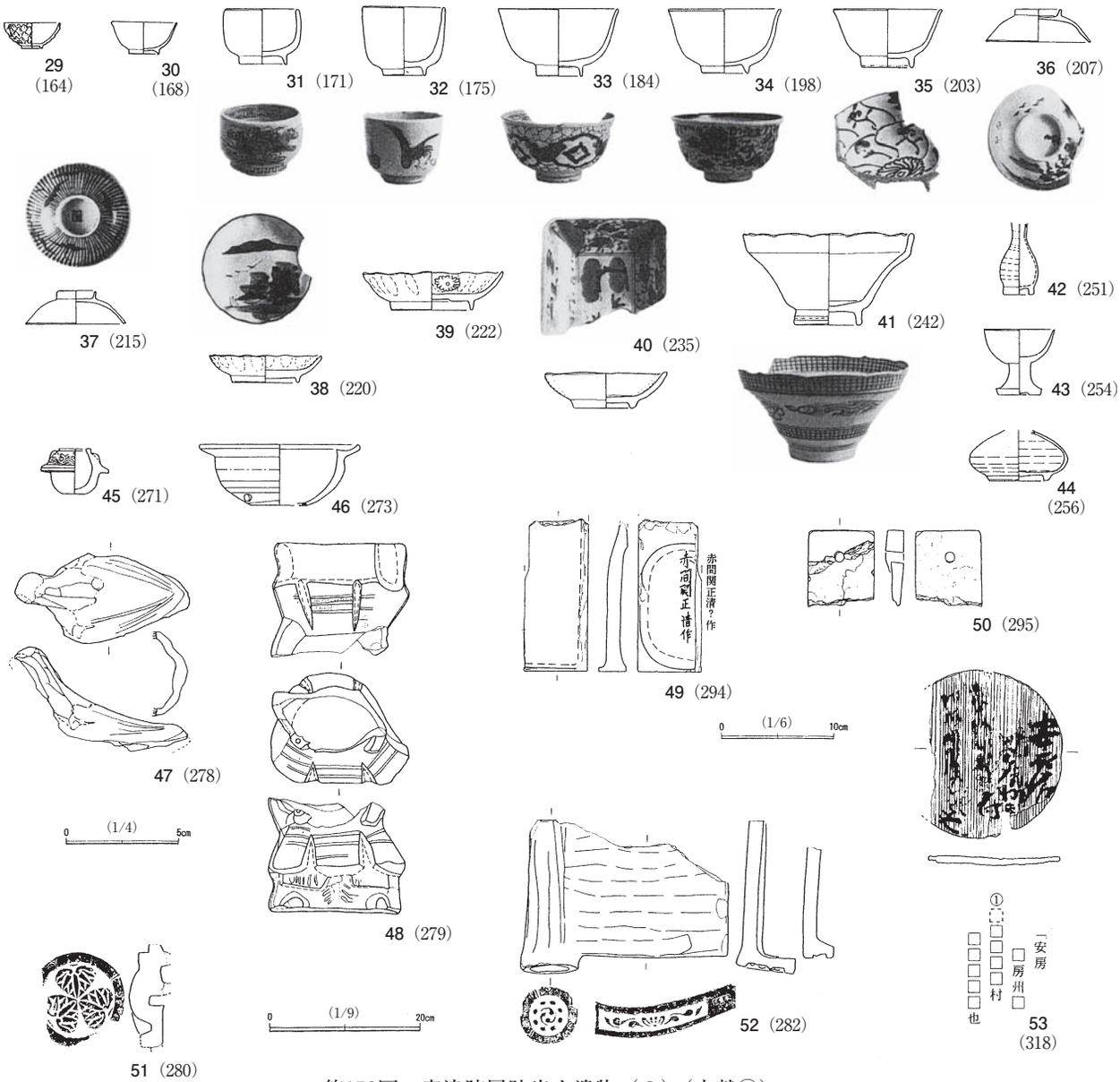


第148図　富津陣屋跡遺構配置図（文献①）



（ ）：報告書遺物番号

第149図　富津陣屋跡出土遺物（1）（文献①）



第150図　富津陣屋跡出土遺物（２）（文献①）

反碗）である。９～ 11は徳利（９瀬戸・美濃灰釉（貧乏）徳利、10信楽系灰釉（燗）徳利、11京系灰釉徳利）である。12～14・16は瀬戸・美濃鉢類（12鉄釉鉢、13鉄釉土鍋、14灰釉片口鉢、16灰釉に緑釉流し掛けの手水鉢）、17・18は土瓶（17相馬系青土瓶、18黄釉にうのふ釉の瀬戸・美濃）である。19灰釉双耳壺、20鉄釉仏花瓶、21灰釉植木鉢である。22・23は信楽系（22油皿、23油受皿）である。24～26は瀬戸・美濃（24鉄釉ひょうそく、25鉄釉台付ひょうそく、26灰釉油受皿）である。27・28は炻器（27堺系擂鉢、28常滑大甕）である。 29～44は磁器である。碗類は、29・34が瀬戸・美濃（29型作り白磁紅猪口、34染付碗）、30～33は肥前系染付（30小杯、31碗、32筒形碗、33碗）、35が舶載品（清朝染付碗）である。36・37は碗蓋（36肥前系染付、37瀬戸・美濃染付）である。38～40は染付皿（38・39肥前系、40瀬戸系角皿）である。その他41～44は肥前系染付（41鉢、42一輪差し、43仏飯器、44香油壺）である。45～48は玩具である。45・46は陶製（45茶釜、46土鍋）で、47・48は素焼き（47鳩笛、48武将の土人形）である。なお、江戸遺跡の調査例との比較では、徳利とカワラケの出土が極めて少ないこと、瀬戸・美濃系双耳壺の出土量が多いこと、

江戸で見られない鍔付土製火鉢が出土していること等があり、「閉ざされた空間」が指摘されている。

陶磁器以外の遺物は、49は石硯で「赤間関正清カ作」から、下関のブランド赤間石を現している可能性ある。50は携帯用温石である。51は鬼瓦で丸に三つ葉葵は最終統治藩上野国前橋藩主松平氏家紋か、52は軒桟瓦で巴・珠文と唐草文である。53は曲物蓋で「安房」他の墨書が残る。その他、銭貨・小刀・キセル・火箸・鉄炮玉等の金属製品、ワインボトル・かんざし等のガラス製品が出土している。

3．小結

建物跡や塀跡は、1850年前後と推定される陣屋絵図面と同じ配置であるが、「ろうそく石」は、江戸遺跡では地盤の緩い地点で検出され、近代の工法とされていることからも、補修や増改築は随時行われたことが推測される。また、出土陶磁器類の生産年代は当陣屋の存続時期（1821年～1868年）と合致している。こうして、堀・土塁・長屋塀によって外部と隔絶された中に、藩の家臣・藩士が多く居住し、周辺の村とは独立した「町」が形成されていたようである。筑紫俊夫氏は、墓標の調査から、陣屋に駐留した中流以上の家臣の多くが家族を伴って生活していた可能性を指摘している（文献②）が、化粧道具や玩具の出土はそれを裏付けるものである。

文献

①松本勝　1997『千葉県富津市　富津陣屋跡発掘調査報告書－佐野一平宅宅地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告－』（財）君津郡市文化財センター

②筑紫俊夫　1990「墓標からみた江戸湾沿岸防備」『都市周辺の地方史』

おわりに

本章では６陣屋の調査例を紹介した。存続時期の古い方から、東条陣屋1620年～1692年、飯野陣屋1648年～1868年、高岡陣屋1676年～1871年、富津陣屋1821年～1868年、真武根陣屋1850年～1868年、長尾陣屋1868年～1871年である。東条陣屋・富津陣屋はある程度の面積の面的調査が実施されたが、飯野陣屋・高岡陣屋・真武根陣屋・長尾陣屋はトレンチを中心とした限定された調査である。以下、注目される点を記すことにする。

遺構に関しては、17世紀前半まで遡る東条陣屋・飯野陣屋では古い段階の大溝（堀）が検出されたことが注目される。特に東条陣屋の堀は直角に屈曲する城郭構造に類似するもので、徳川家親戚の名家西郷氏によるものであろうか、或いは城郭・陣屋の築造に関しての制約が未だ確立されない幕藩体制期の社会を表すものとも考えられる。また、真武根陣屋の土塁配置も城郭構造に類似するが、それに伴う空堀はないことから、制約を受けながらも幕末の外国からの脅威や倒幕運動の社会情勢の影響を受けたことも考えられる。

遺物に関しては、東条陣屋でまとまった資料の少ない17世紀の良好な遺物群が注目される。また、富津陣屋では絵図面や遺物等からある程度の家臣が整然と立ち並ぶ長屋で家族と共に赴任して生活していたことが明らかとなったが、化粧道具や玩具は東条陣屋・飯野陣屋からも出土しており、堀や塀に囲まれた陣屋内が一つの「町」として機能していたことが推測できる。

今後は、各陣屋の格や機能、担当藩の動向、また周辺村落との違いが、どう遺構・遺物に表れるかの視点で比較されれば、よりその歴史が明らかになっていくものと考えられる。

第６章　房総陣屋の特質と課題

第１節　房総陣屋の特質

既に研究史の項で述べた如く、房総の陣屋研究はいわば城郭研究の一つとして大名陣屋が採り上げられることはあっても、近年の海防陣屋を除いては数量的にも内容的にも総体として戦前の水準を大きく越えることはなかったといってよい。つまり、一部を除いては陣屋の存在そのものが知られていたにすぎず、結果として分類作業さえみられなかった。まず、今回の作業結果を提示する。

	下総国（茨城県分除外）	上総国	安房国
１大名陣屋	10	12（1）	6（2）
２旗本陣屋	10（2）	20	2
３大名出張陣屋	6	7	1
４代官陣屋	3	0	0
５海防陣屋	2	2	2
小計	31（2）	41（1）	11（2）
合計			83（6）

＊括弧は房総新藩

＊括弧は不確定

下総国の現茨城県分を除いていること、また、江戸時代を通した集計、さらに面積比を考慮すれば、一概に言えないが、上総それも西上総に比較的多くの旗本陣屋が設けられた一方、安房はその逆といえる。また、大名出張陣屋の安房１か所は分所のようなものであるから、これも一つの傾向といえよう。もちろん、藤井陣屋のように、近年明らかになった例もあることとて、さらなる検討が必要である。なお、代官陣屋については既述したとおりである。

図版161　房総最大の台場大房岬（右側江戸湾口）

海防陣屋はこれに多くの台場を加えれば当然上総・安房に圧倒的で（小佐部・勝浦・前原なども海防陣屋兼用）、下総の場合も１例（亥鼻）は駐屯地といった内容である。もちろん、海防とはいっても、大名預地を伴う場合はその支配を含んでの性格もあろう。房総の海防陣屋・台場は文化８年の竹ヶ岡・波佐間両陣屋に始まり、文政・天保期の台場ラッシュまた富津陣屋取立・波佐間廃止を経て、天保期には鶴ヶ谷（北条）を新たに加えた３陣屋体制が展開された。この点、開始時期においては同様ながら、相模とはその後の密度の差は歴然で、ペリー来航前の打沈め線に当たる富津－観音崎ラインに当たる横須賀一帯には陣屋はともかく多くの台場が築かれた。さらに来航後の嘉永７年から品川台場の築造が始まり、江戸城下以南（佃島・越中島～）の沿岸でも陣屋・台場が築かれていった。状況の変化に加え、江戸の対岸ということもあろう。結果として、富津沖台場をどうみるかという点はあるが、房総には稜堡式の台場は造られなかった。

しかし、その反面、房総の陣屋・台場はそのほとんどが程度の差はあれ残されている。武蔵・相模の海防陣屋・台場がほとんど消滅した現在、貴重な遺産といえるのではなかろうか。

さて、畢竟このような様相は関東では海を隔てて隣接する相模国と通ずる様相といえるが、大名陣屋・同出張陣屋は面積比からしても明らかに相模より多い。これも房総のあり方といってよい。

陣屋の構造については、各陣屋の種類によって異なることは既に述べた。大名陣屋の場合、土塁・堀囲みの長方形が多いとはいうものの、複郭且つ大規模な土塁と水堀の巡る飯野、同様ながら規模の劣る高岡、塁線を曲げたり、変形プランを有する小見川、堀と切岸状壁面の巡る多古のような例もある。近世後半以降の陣屋では城郭要素がほとんど見られなくなることから、前半代に備わった様相といってよい。何れも当主の御殿空間が多くを占めるが、内外にも侍屋敷が設けられた。なお、旗本陣屋で城郭構えのものは現段階では確認されない。

これら大名陣屋と旗本陣屋との階層別規模であるが、大名陣屋については、10,000石以上の潤井戸・飯野・鶴ヶ谷・鶴巻などが、40,000㎡を越える規模を有している。最も多くを占める10,000石クラスは高岡・真武根・小見川・内田などのように10,000㎡を越えるものもあるが、むしろそれ以下のほうが多い。一方、旗本陣屋では、5,000石以上の吉田や飯篠は別格として、大体平均で4,000㎡といったところである。しかし、この規模については、区劃外の下級藩士長屋群を含むかどうかでも異なり、そもそもその有無を把握出来た例は少ない。また、生実陣屋や岩戸陣屋のように中世城郭を活用した場合や勝山陣屋のように谷間に占地するケースでは、始めから地形条件に制約されてしまう。さらに、近世も半ば以降は堀などの区画性も不十分で、発掘調査例の少ないことと併せ、その規模の厳密な把握については、まさに今後の課題といってよい。

大名出張陣屋では単純に飛地領の大きさと比例せず、陣屋・建物の規模等に顕著な差は見出せない。小佐部の推定規模をどう見るかという点はさておき、10,000㎡を越えるものは無く、大森や三本松などが5,000㎡以上の他はそれ以下である。御殿空間がないということもあろう。但し、派遣された藩士の人員や現地採用のあり方などは長屋の数などに反映されている。

海防陣屋の具体的な姿は富津陣屋で明らかにされた。限られた年代幅の波佐間陣屋、ほぼその範囲が把握され、絵図も残る竹ヶ岡陣屋、炮墩を明瞭に残す台場群など、その存在そのものが房総海防の特質へと転化する。更なる研究の深化が近世史に与える影響は大きいであろう。

第２節　房総陣屋研究の課題

以上で房総陣屋の概要は知り得たかと思われるが、個々の陣屋研究が一部の例外を除き進展しなかったという事情を考えれば、その限界もあえて言うまでもない。ここでは、あくまでも現段階での課題それも基本的な課題を列挙することになろう。

江戸初期それも関ヶ原戦までの徳川中・下級家臣団配置状況は未だ良くわかっていない。それ故、彼らが房総で設けた居屋敷そのものはもちろん、その階層差を含めた実態解明はまさにこれからの研究にかかっている。旗本押田吉正は近世初頭にいち早く徳川氏に仕え、匝瑳郡野手村で500石を与えられたが（天正19年知行宛行状）、彼の父胤定は「八日市場・大須賀両城守衛」にして、代々野手一帯を地盤とする千葉一族の在地有力土豪（彼自身の妻は武射郡大台城主井田因幡守の娘）であった（「寛政重修諸家譜」、「断家譜」）。

その居館は隣接する字御屋敷と推測され、中世から近世に跨って生き抜いた房総でも希なケースと言って良い。子孫は、豊勝―頼意―為則と嗣ぎ、最後の為則の代に嗣子無く断絶した。野手円長寺には押田氏の墓所があり、月星の紋が墓石に確認される。また、幕末請西藩10,000石の林氏（信濃国林郷に由来）は近世初頭に殿部田村200石を領したが、その在所が市原市外部田に該当する可能性が高い。殿付きの字名は中世というより、しばしば近世居屋敷に由来するが、事実養老川を隔てた台地上（龍渓寺）には元和～寛政期に渡る林家の石塔が林立する。

図版162　野手円長寺押田家墓所

近世陣屋・台場の発掘調査例は中世城郭のそれと比較した場合、極端な差がある。これは約１：10という比率からしてもまったく不釣合いと言わざるをえない。確かに、いわゆる近世考古学の歴史自体が昭和40年代以降にようやく認知されたことを思えば、それも一つの理由であろう。加えて、近世史研究のなかで陣屋研究、とりわけ装置としての研究に乏しく、その必要性が提起されてこなかったという事情もあろう。しかし、江戸屋敷とならんで、陣屋は大名・旗本の家政・知行所支配の中枢であった。多くの江戸屋敷の調査結果は単にその時期的変遷のみならず、文献では知り得ない多くの情報をもたらしている。対となる陣屋を加えることで消費地との比較など、様々な側面が明らかにされるはずである。

海防陣屋はともかく、台場・遠見台の研究はまったく進んでいない。これは現地に明瞭な遺構として残されていなかったり、伝承・記録に乏しいという事情もあろう。しかし近年は実際に海防を担当した各藩の勤番日記や記録が所在する市町村史等に収められるようになり、かなり詳しくその状況が把握出来るようになった。とりわけ、配備された大小筒・銃（ちなみに当時大砲という表記はほとんどない）の種類・数はそれなりに把握出来るが、そこから先の追求はなされていない。緊迫する対外情勢により、その当時は空前の鋳造ラッシュとなった。鋳鉄製もあったが（一宮藩など）、ほとんどは在来の技術による青銅製であり、ために村々の梵鐘が目を付けられることもあった。富津、大房の10数挺を最多として、多いときには房総全体で70挺以上にのぼっている。備炮は貫・匁（希にポンド）という重さの単位で分けられ、主要な台場には１貫目以上の大筒が配備されたが、各所の構成は例えば弘化５年会津藩時代の富津陣屋13挺は17貫300目～１貫目にわたり（松平容敬「房総備場一件」）、ばらけた配備となっており、これは竹ヶ岡でも同様である。当時、幕府・諸侯は外国船の性能・備炮、航海術をそれなりに認識しており、蘭学の普及もあって砲の性能に極端な差があったわけではない。ただ、西洋に比して一段階前の技術また生産水準にあり、しかも幕府、各藩の取り組み差も大きかった。さらに、決定的なのはこの前後における彼我の技術進歩に大きな差があったことで（施条後装式のアームストロン

図版163　大多喜藩領荒崎台場・遠見台絵図部分

グ炮は嘉永年間には来航船に装備されていたが、それもまもなく新鋭炮に交代、ちなみに、その当時我が国最先端にあった佐賀藩では文久年間に試作)、それが海防そのものの質的転換を促していることである。房総の台場研究がこの分野に益する余地は大いにあろう。

初期関東における幕領支配が陣屋支配によって行われたことは既に指摘されているが、その陣屋地の比定と実態解明は今後の研究に委ねられている。従来まったく考慮外であった江戸初期に溜池や新田開発に関わった幕府代官（既述した関口作左衛門のほかに、東金の島田重次、小見川の吉田佐太郎など）の現地役所など、今回もまったく不十分というほかない。また、わずかにふれた第４章の口留番所や会所についても同様である。

最後に、大名及び大名出張陣屋、さらに旗本陣屋もそうであるが、その領地や知行所経営は有力名主層を支配の末端に組み込むことで成り立っていた。彼らは上に近く下にも近い存在であり（そのため大庄屋、割元停止令が出たこともあったが)、彼らなしには時に村々の疲弊を乗り越えて再生産を成し遂げることは出来なかったであろう。そのことは例えば市原郡内10か村の割元として世襲代官を務めた立野家の家訓（「役儀家言」）に明らかで、その意味では、陣屋の研究を狭い枠内（狭義の陣屋）に留めるべきではない。究極的にはその本質が近世史のなかでどう位置付けられるかということにあるのだから。

図版164　大須賀家近景（現加曽利貝塚博物館敷地内）

＊大須賀家は千葉六党の系譜を引く家系で、近世には幕張村の名主を務め、その屋敷は代官屋敷と呼ばれた。奥の間を備えた家の造りは権威の象徴でもあった。